昭和58年2月1日号（毎月2回1日、15日発行）第26巻・第3号　通巻577号　昭和54年6月2日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1983
3
2.1.

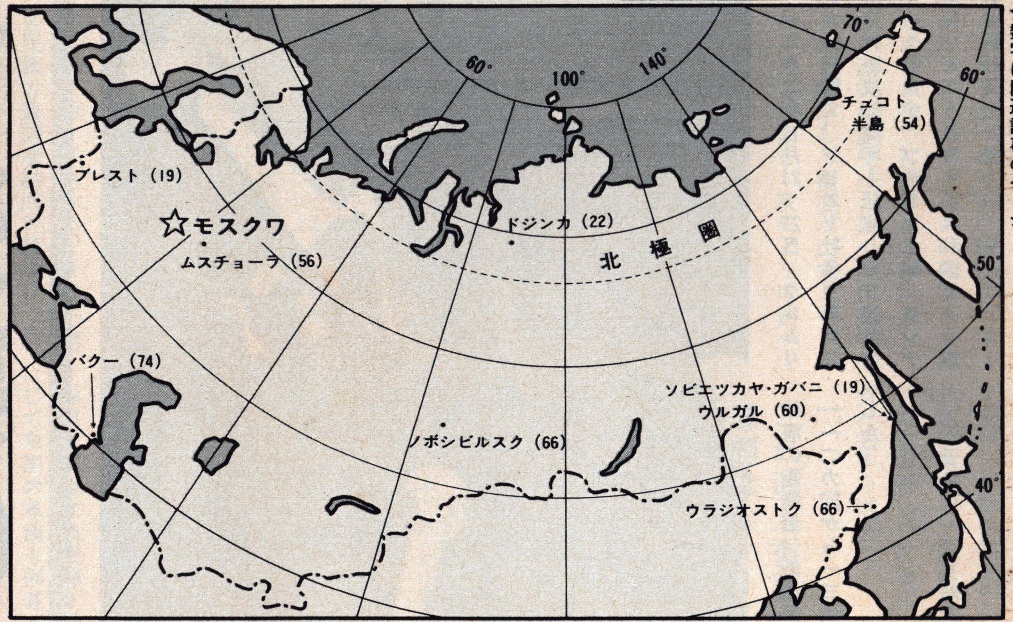
ソ連邦結成60周年祝賀会



第3号　1983年2月1日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

ソビエト社会主義共和国連邦大使館
東京都港区麻布台2—1—1　電話(583)4224
(本誌についてのお問合せは広報部へ)

広報部　東京都品川区東五反田3—9—13
郵便番号141　電話(03)447—3536(代表)
振替口座東京9—122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　東京都千代田区西神田2—7—12　電話03(263)2811　振替口座東京0—13581
(加入者名＝新時代社)

ソ連邦結成60周年祝賀会

ソ連邦の60年

——Y・V・アンドロポフの報告要旨

　一九八二年12月21—22日、クレムリン大会宮殿で、ソビエト社会主義共和国連邦結成60周年を記念したソ連共産党中央委員会、ソ連最高会議、ロシア連邦ソビエト社会主義共和国最高会議の合同祝賀会が催され、党とソビエト政府の指導者、外国来賓が出席した。一一二カ国から一三四の代表団が到着した。

　祝賀会はソ連共産党中央委員会政治局員、ソ連共産党中央委員会書記K・U・チェルネンコの開会のあいさつで開かれた。



祝賀会で報告するアンドロポフ・ソ連共産党中央委員会書記長（1982年12月21日）



　あいさつの中でK・U・チェルネンコは、ソ連邦の誕生は人類の近代史における最も輝かしく重要な出来事の一つであったと指摘し、次のように述べた。

「われわれの道は平坦ではなかった。われわれは過ちも犯した。しかし党はたえず自分の行動をレーニンの遺訓と照らし合わせ、過ちを認め、直した。われわれは多くの厳しい試練を見事に克服した。そして今日この祝日に当たって、ウラジーミル・イリイチ・レーニンの遺訓は実現された、とわれわれは完全な権利をもって言うことができる。

　それを証明しているのは、わが国の諸民族の揺るぎない友好、わが社会の統一、すべてのソビエト共和国の目ざましい成果、ソ連共産党第26回大会の決定を実現するためのソ連国民の組織だったエネルギッシュな活動である」

　さらにK・U・チェルネンコは「最初の多民族労農国家結成の経験は、社会進歩をめざす多くの闘士にとって一種の導きの星となっており、激動の複雑な20世紀の動きに深刻な影響を与えている」と強調した。

　祝賀会でソ連共産党中央委員会書記長ユーリー・ウラジーミロビチ・アンドロポフは「ソ連邦の60周年」と題する報告を行い、祝賀会出席者と外国来賓の拍手を浴びた。

これ以上重要な課題はない！

　祝賀会での報告の中でY・V・アンドロポフは「小さなものであれ、大きなものであれ、限定されたものであれ、全面的なものであれ、核戦争は許してはならない。新しい戦争に火をつけようとしている者たちの手を押さえること——いまこれ以上重要な課題はない」と述べた。

　Y・V・アンドロポフは報告の国際問題に関する部分の中で、次のような提案を出した。

　——ソ連は双方が核兵器だけでなく、通常兵器も最初に使わないことについて取り決める用意がある。

　——ソ連は自分たちの戦略軍備を25%以上削減する用意がある。それに応じて米国の軍備も削減されなければならない。

　——ソ連はいっそうの軍拡競争のすべての可能なチャンネルを閉ざし、数百の単位で戦略兵器の貯蔵分を削減することを提案する。そしてこれは軍備



クレムリン大会宮殿の祝賀会の会場

のさらに大規模な相互削減のための出発点にすぎない。

——ソ連はMXミサイルに対して同じようなわれわれのミサイルで、米国の長距離巡航ミサイルには現在実験中のわが国の長距離巡航ミサイルで対応せざるをえない。米国人にとって新兵器システムはまやかしの〝切り札〟である。

——ソ連はソ連の欧州部でSS20を含む数百基のミサイルを削減し、英仏両国が保有しているのと同数（1基たりとも上回らない）のミサイルだけを保有する用意がある。中距離核兵器搭載航空機の数も、双方同じレベルに削減することについても合意しなければならない。

Y・V・アンドロポフの報告は、ソ連の60年間の歩みを深く分析している。

——正当にも〝諸民族の牢獄〟と呼ばれていたロシアでは、当然のことながら、民族問題はボリシェビキ党の戦略と戦術を立てるさいの最重要問題の一つとして打ち出された。

レーニンの関心の中心におかれたのは、諸民族の真の永続的な接近を保障する唯一の確実な手段としての民族自決権であった。

今日自明の理と見えることも、この激動の過渡期にあっては決して自明ではなかった。国家連合（コンフェデレーション）の枠の中で諸共和国のゆるやかであいまいな連合体をつくるという計画から、これら共和国に自治権を与えてロシア連邦に編入せよとの要求にいたるまでの、ありとあらゆる意見が衝突した。

レーニンの遺訓

唯一の正しい道——社会主義的な連邦結成の道を見いだし、固守するためには、レーニンの天才と権威が必要とされた。

レーニンが示した道の本質は何か？ Y・V・アンドロポフは次の点を挙げた。

——社会主義諸共和国の連邦の最大限の強固さを保証するものとしての、自由な諸民族の同盟の完全な自発性。

——すべての民族の完全な同権、これら諸民族の法的不平等のみならず、事実上の不平等の廃絶をもめざす首尾一貫した方針。

——兄弟的同盟の枠内での各共和国、各民族の自由な発展。

——国際主義的自覚のねばり強い育成とわが国の大小すべての民族の接近をめざす不動の路線。

レーニンは「さまざまな民族の利益をきわめて注意深く扱うことだけが、紛争の基盤を一掃し、相互不信を根絶する」と指摘した。

——レーニンの遺訓、民族政策のレーニン的原則は、われわれにとって神聖なものである——とソ連共産党中央委員会書記長は述べた。

発展の成果

われわれの発展の最も重要な成果とは、どのようなものか？

——民族問題の解決は、階級的基盤にもとづいてのみ発見しうるというマルクス・レーニンの学説の歴史的な正しさが完全に実証された。社会的敵対とともに民族的反目、あらゆる種類の人種的、民族的不平等と抑圧も過去のものとなった。

——共産党とその科学的に根拠づけられた政策が、民族問題の社会主義的解決における指導的、嚮（きょう）導的な力であり、この解決の正しさの保証であることが、明確に示された。

——まだ封建的・家父長的関係や氏族的関係さえもが、しばしば優位を占めていた後れた民族的辺境が消滅した。

——全国家的な計画によって方向づけられているすべての共和国のダイナミックな経済発展にもとづいて、単一の連邦国民経済コンプレクスが形成された。

——各共和国の社会的構造が質的に変化し、それぞれの共和国で現代的な労働者階級が育ち、農民は新しいコルホーズの道を進み、自国の知識人層がつくり出され、国家生活および社会生活の全分野において熟練要員が育てられた。

——進歩的な伝統、文化財の盛んな交換にもとづいて、社会主義的多民族文化が花開いた。

——現在新しい歴史的な共同体——ソビエト国民を形成する社会主義諸民族が形成された。

——60年間に民族関係の中で起こった質的変化は、搾取制度がわれわれに残した形での民族問題が見事に解決され、最終的に、後戻りすることのない形で解決されたことを証明している。国の多民族構成は史上初めて、その弱さの源泉から力と繁栄の源泉に変わった。

問題は解消していない

民族問題の解決における成功は、すべての問題が解消されたことを意味す

るものでは決してない。

とりわけ、各共和国の天然資源や労働力資源、気候の特色を全体の利益のために最も賢明に利用しなければならない。

Y・V・アンドロポフはソ連諸民族の文化の実り多い相互富化について語った。

実生活は、大小すべての民族の経済的・文化的進歩が、それぞれの民族的自覚の必然的な成長を伴うことを示している。これは法則にかなった客観的プロセスである。

しかし達成された成功に対する当然の誇りが、民族的うぬぼれあるいは高慢に転化し、唯我独尊の傾向や他民族を尊重しない態度を生みだすことのないようにすることが重要である。

われわれが現存する諸問題についても、未解決の諸課題についても大胆に語るのは、これらの諸問題、諸課題はわれわれにとって解決可能なものであり、われわれはそれを解決できるし、解決しなければならないということをしっかり知っているからである。大言壮語ではなく、実際に仕事にかかる気構え——偉大で強力なソビエト社会主義共和国連邦をさらに強化するために今日必要なのは、このことである。

われわれの原則

Y・V・アンドロポフは報告の国際問題に関する部分のなかで、平和共存の原則がソ連の対外政策の基本であると指摘した。

社会主義的国際主義を基盤におく社会主義諸国間の新しい型の関係が形成された。ソ連は世界社会主義の強化と繁栄のために出来得る限りの努力を払うだろう。

非同盟運動について

われわれは、今日もなお、それぞれの民族の自由と独立、存続自体のために闘争することを余儀なくされている人々の側に、だんことして一貫して立っている。ソ連の人々は、植民地的抑圧から解放された新興諸国の諸国民が、独立の強化と福祉や進歩のための闘争で大きな成功を収めることを願っている。Y・V・アンドロポフは非同盟運動が国際生活に有益な貢献をしていることを指摘した。

凍結し、削減しよう！

Y・V・アンドロポフは、ワシントンの現在の政策が、国際情勢を極端に危険な限界にまで緊迫させたと指摘した。新しい戦争に火をつけようとしている者たちの手を押さえること——いまこれ以上重要な課題はない。

さきにソ連は最初に核兵器を使わないと一方的に約束した。わが国はパリティーの維持を出発点にした米国との誠実な合意を求めている。われわれは自分たちの戦略軍備を25％以上削減する用意がある。そして交渉が行われているあいだは、われわれは良識が示す通りのこと、つまり双方の戦略兵器を凍結することを提案する。

対応の用意あり

軍備のいっそうの増強計画は、ソ連に一方的譲歩を強いることはできない。米国側の挑戦に対して、われわれは対応する自国の兵器システムで、つまりMXミサイルには同様のわれわれのミサイルで、米国の長距離巡航ミサイルには現在実験中のわが国の長距離巡航ミサイルの配備で対応せざるをえない。

信頼への道

Y・V・アンドロポフは信頼措置に関する問題に触れ、この問題についてのこれまでのソ連の諸提案をあげ、米国大統領の最近の提案を含めて、他の諸提案も検討する用意があると述べた。しかし米国大統領が述べたような措置だけでは相互不信の空気はなくならず、信頼は回復しないだろう。何かもっと大きなこと、つまり情勢を正常化し、敵意と憎悪の宣伝や核戦争の宣伝を拒否することが必要である。もちろん、信頼と偶発戦争も含めたあらゆる戦争の防止への主要な道——それは軍拡競争の停止であり、国家間の平穏で礼儀正しい関係への復帰、デタントへの復帰である。

欧州にとっての算術

Y・V・アンドロポフは欧州の平和を維持する課題について述べ、欧州の目標をたたくためのあらゆる種類の核兵器を——中距離核も戦術核も含めて——放棄する協定の締結を呼びかけたソ連の提案を挙げた。

わが国は、ソ連とNATO諸国が中距離兵器を1/3以下に削減するという別の案も出した。さらにY・V・アンドロポフは、われわれはソ連が欧州に、英仏両国がそこに保有しているのと同数のミサイルだけを、それを1基たりとも上回らない数を残すことにも同意

する用意がある、と述べた。これは、ソ連が西側でSS20と命名されている最新型のミサイル数十基を含め、数百基のミサイルを削減することを意味する。

ソ連と米国に関していえば、これは中距離ミサイルに関する真に誠実な〝ゼロ・オプション〟となるだろう。また英仏のミサイルの数が将来削減されれば、ソ連のミサイル数も同じ数だけ追加削減されよう。

これとともにソ連ならびにNATO諸国が欧州地域に配備している中距離核兵器搭載航空機の数も、双方同じレベルに削減することについても合意しなければならない。

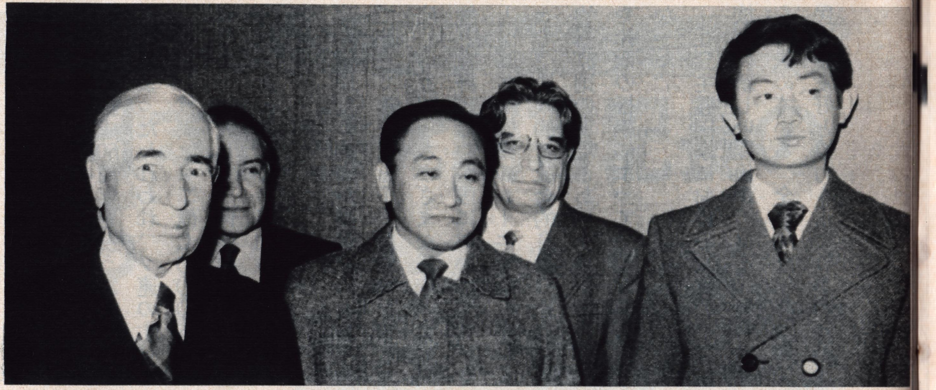
手後れにならないうちに

われわれは、まだチャンスがあるうちにこのチャンスを生かし、この明確かつ公正な合意を受け入れるよう、相手側に呼びかける。しかし誰も思い違いなどしないでもらいたいが、われわれはわれわれの安全、わが同盟諸国の安全が脅威にさらされるのを決して許さない。

最後にY・V・アンドロポフは、ソ連は現在および未来の世代のために、安らかで平和な未来を保障することに全力を尽くすであろう、と強調した。



休憩時間の大会宮殿ロビー



ソ連共産党中央委員会、ソ連最高会議幹部会、ソ連政府の招きにより、立木洋・日本共産党幹部会委員（中央）を団長とする日本共産党代表団がソ連邦結成60周年祝賀のためモスクワを訪れ、P・N・フェドセーエフ・ソ連共産党中央委員（左端）が一行を出迎えた。

ロビーで談笑するソ連の各共和国から出席した代表たち▼





ソ連最高会議代議員の舞踊家マフムド・エサムバエフ（左）、歌手のマリア・ピエシュと語る柴野安三郎・北海道日ソ貿易協会理事長

世界の議会、政府、政党、諸国民へ

このメッセージは、12月22日のソ連共産党中央委員会、ソ連最高会議、ロシア連邦ソビエト社会主義共和国最高会議の合同祝賀会で会員一致で採択された。

ソ連邦結成60周年を祝うためモスクワに集まったわれわれ、ソ連のすべての民族の代表は、二億七〇〇〇万のソ連国民を代表して、世界の議会、政府、政党、諸国民にこの平和のメッセージを送る。

人類最良の英知が幾世紀にもわたって夢見てきたこと——民族的な敵意と反目の克服、さまざまな民族の真の同権と友好が、わが国において、共産党とソビエト国家のレーニン的政策によって、民族的、社会的自由の社会主義的諸原則の実現とあらゆる形態の抑圧や搾取の根絶によって、現実のものとなった。

社会主義国家における人々の、諸民族間の新しい関係が、ソ連の対外政策をも決めている。全般的な平和、諸国民間の友好と協力——これがわれわれの理想であり、われわれの不変の目的であり、つねに配慮していることである。

10月社会主義大革命は、新たな歴史的時代の始まりを告げた。働く人々は社会的、民族的くびきを投げ捨て、ソビエトの国——諸民族の兄弟的友好と同権の関係を確立し、すべての民族に真の自由、進歩、繁栄を保障した国家をつくり上げた。

堅固で、確実で、安定した平和——これは、すべての人々、すべての民族、全人類の最高の、最緊要な要求である。

諸国家が人類の文明や地上の生命そのものを滅ぼすことができる兵器を保有し、七〇年代に大きく後退させることができた戦争の脅威が再び増大し、国際緊張も目立って強まっている現下の情勢において、平和の要求はとくに重要な意義をもっている。

諸国家のあらゆる努力、各国の政府、組織された政治勢力、すべての市民の活動はいま、核破局を許さないということに向けられねばならない。これ以上に重要な問題はないし、またありえない。

われわれ、全権を与えられたソ連国民の代表は、ソ連が平和と国際協力のレーニン的政策に従い、戦争の防止に全力を尽くすことをおごそかに声明する。

われわれは、自分が行った約束に従ってソ連が核兵器の先制使用に訴えないことを確認し、他の核保有国に対し同様の約束を行うよう再度呼びかける。

われわれは、ソ連が米国との相互主義にもとづいて自己の核兵器庫を凍結する用意をもつことを声明する。

われわれは、戦略兵器の制限と削減および欧州の核兵器の制限に関するソ米交渉のすみやかで効果的な終結、中欧の兵力と軍備の削減に関する合意のきわめてすみやかな達成を主張する。

われわれは、核実験の完全・全面禁止についてただちに合意し、その新しい種類や型が開発できないようにすることを提案する。

われわれは、化学兵器の禁止と廃絶を主張する。

われわれは、軍備の制限と削減の他のあらゆる問題について中断されている交渉の早期再開を呼びかける。

われわれは、世界のすべての国の立法府と政府に対し、もっぱら政治的な手段による紛争情勢と緊張の火元の調整を積極的に促進するよう呼びかける。

われわれは、国連の強化、国際平和と安全の強化における国連の役割の向上を主張する。

これらの目的のためにソ連は、その政治・社会体制に関わりなく世界のすべての国と協力する用意がある。

現在、世界のすべての国家に課せられている歴史的な責任、現在と未来に対する責任は、きわめて大きい。

ソ連国民は、諸国家と諸国民がその努力を結集して戦争の脅威に打ち勝ち、地上の平和を維持、強化し、人々の生存権を保障できることを確信している。われわれは、世界の議会、政府、政党、諸国民にこのような努力の結集を呼びかける。

ソ連共産党中央委員会
ソビエト社会主義共和国連邦
最高会議

モスクワのソ連邦結成60周年祝賀勤労者集会での

高沢寅男・日本社会党副書記長のあいさつから



ロシア連邦共和国最高会議代議員の農業技師テレンチー・マリツェフと語る高沢氏（クレムリン大会宮殿で）

人類の歴史のなかで、20世紀という世紀は、特別の意味をもった世紀となりました。それは、偉大なる天才レーニンの指導のもとに10月社会主義革命が成功し、ソビエト連邦の生まれたのが20世紀に属するからです。立ちおくれた半封建的な国であったロシアは、10月革命ののち急速にその面目を一新しました。

ソビエト連邦は、科学的社会主義の理論にみちびかれつつ、今までに人類の経験したことのない道を急速に前進し、発達した工業と農業、発達した科学技術と文化芸術をもった強大な社会主義国になりました。

ソビエト連邦は、一〇〇をこえる民族を包含する世界最大の多民族国家として、各民族の伝統に根づいた文化の花を開かせ、各民族の自主、自決と同権にもとづくかたい団結を実現しました。

さらにまたソビエト連邦は、人民に対してきわめて高い水準の社会保障と福祉を保障しました。ソビエト連邦にはインフレも恐慌も失業もありません。

しかも、こうしたソビエト連邦のすばらしい成果を、未来にむかって確実に発展させ向上させてゆくことが展望され、計画されています。

ソビエト連邦が、ファシストとの戦争で受けた莫大な人的、物的損害にもかかわらず、きわめて短い期間のうちにこうした歴史的勝利をおさめたことに、まさに社会主義体制の優位性が示されています。

この地球上にソビエト連邦が存在するというそのこと自体によって、全世界の被搾取人民と被圧迫民族の解放闘争は限りないはげましをうけてきました。そして今では、この地球上には、十数カ国の社会主義国をふくむ社会主義ブロックが形成されています。新旧植民地主義の鎖を断ちきって自由と独立をかちとった国は数十カ国にのぼります。それらの新興独立の民族民主国家のなかには、社会主義をめざして前進する国が次々に現れています。こうして国際政治の分野においても、社会主義の優位性が明らかになりつつあります。

こんにち、全人類にとっての最大の課題は、さし迫った熱核戦争の危険をとりのぞき、熱核兵器、化学兵器等の大量殺戮兵器の全面禁止、完全廃棄をかちとり、さらに進んで通常兵器もふくめた全面完全軍縮を実現することであります。そのためには、アメリカをはじめとする帝国主義勢力によってすすめられている限りない軍拡競争に対して、全世界の平和擁護勢力の統一戦線を結成し、危険な帝国主義者、軍産複合体の腕に手錠をかけなければなりません。デタントと平和共存の大波によって戦争挑発の火元を消しとめなければなりません。

こうした闘争においてソビエト連邦が示しておられる平和擁護のための力強いイニシアチブを、日本社会党は高く評価し、これを支持いたします。

皆さん、ソビエト連邦が結成されてから60年のあいだに世界は巨大な変化をとげました。この変化をもたらした主要な力であるソビエト連邦の党、政府、人民に対し、私は心からの敬意を表します。

あと18年たつと21世紀の幕が開きます。われわれの子孫のために、21世紀を、20世紀よりもさらに輝かしい平和と社会主義の世紀にしなければなりません。そのために、私たちもあなた方も、ともにスクラムを組んで奮闘しましょう。

ソビエト社会主義共和国連邦が、世界各国の先頭にたって、21世紀へむかって力強く前進されることを期待しつつ、私のごあいさつを終わります。

モスクワの
オスタンキノ・テレビ塔訪問記

アロイズ・フィル
カメラ
V・アルチュノフ
V・シュストフ


天をつくオスタンキノ・テレビ塔


全ソ・ラジオ・テレビ送信所の機械室

一九六〇年代。当時モスクワの辺境だったこの地に、それがどのように建設されたかを私は覚えている。完成すれば、それは当時世界一高い（約五四〇m）建造物になるはずだった。モスクワっ子たちは完成を待ちわびた。新聞は定期的に報道した——オスタンキノ・テレビ塔は50mになった。75mになった。一〇〇mになった……

一九六七年。ちょうど10月革命50周年の年に、ユニークなこの建造物は完成した。その正式な名称はいささか長い。10月革命50周年記念全ソ・ラジオ・テレビ送信所というのがそれだ。だがモスクワっ子たちは従来どおり、単にオスタンキノ・テレビ塔と呼んでいる。

この世の天国

テレビ塔の15年の歴史を全ソ・ラジオ・テレビ送信所の技師長ワジム・オレシニコフが私に話してくれた。彼は開所の日以来ここで働いている。最初は電気技手だった。私たちは塔の途中——地上三三〇mのところにある巨大なガラスの樽のようなレストラン〝第七天国〟のテーブルに座っていた。

第七天国とは、最上天という意味である。さらに言えば、〝有頂天〟という意味でもある。つまり、ここにいれば御満悦というわけだ。オスタンキノ・テレビ塔の「第七天国」はその名のとおりである。その最大の呼びものはモスクワの大パノラマの規模と美しさで、あちこちから感嘆の声が聞こえる。10kmも離れた彼方にクレムリンの塔やオリンピック競技場、国民経済成果博前のロケットのオベリスク（宇宙征服者記念碑）が見えたといって喜んでいるのだ。なかには自分が住んでいるアパートを見つける者もいる。レストランの床は、そうしたお客たちを乗せたまゆっくり回転しつづける。1回転するのに40分。この間、お客たちはすべての方向の景観を楽しめるというわけだ。

第七天国は最上天という意味である。しかし、それはお客たちにとってである。技師長はカギを取り出すと、レストランのさらに上一〇〇mのガラス張りの回廊に通じるドアに近づいた。錠が外れた。オレシニコフはドアを押す。風かなりの透き間が開いた。風が吹き付けて来たので、私は吹き飛ばされた帽子を追いかけて、あわてて後ろへ駆けもどった。

「きょうは静かな方なんですが」と、わびるような口調でオレシニコフが言った。「高所作業班が、いま修理作業をしています」

塔は生きている

こうして私は、塔が絶えず更新の過程にあることを知った。そこではつねに何かが取りつけられたり、取り換えられたり、あるいは新たに出現したりしているのだ。

具体的にはどんなことか？もちろん、高さ三八五mまでのコンクリート一体構造の基部の中でではなく、その上の金属構造体の中でである。オレシニコフの話によれば、設計主任ニコライ・ニキーチン（一九〇七—一九七三）をいちばんうんざりさせた質問は、耐用年数はどのくらい？というものだった。これに対して彼はいつも、「三〇〇年は大丈夫です。その時点で考えましょう」と答えることにしていた。

「その時点で考えましょう」とは言っても、塔が24世紀まで管理や手入れをされずに放っておかれる、ということではない。いや、営繕部の技師たちは1年じゅう、コンクリートがそれぞれの観測点でどのように〝呼吸〟しているか、風圧や温度の変化のもとで〝調子〟はどうかを知らせるセンサーを、文字どおり1mごとにつけ換えている。

「点検の結果は？」

「オスタンキノ・テレビ塔は、人間にたとえれば、乳児の年齢です。人生はまさにこれからです」

数年まえ、この乳児は初めて〝オムツ〟を当てられた。塔全体が特殊なはっ水性の物質の薄い層で覆われたのである。こうしてコンクリートは寒さや雨、熱や風、気温や湿度の急激な変化に対して強くなった。非常に重要なのは、この層が水分ははじくが、空気をよく通すことである。コンクリートも人間と同様に、呼吸しているからだ。

というわけで、塔は当初の新鮮さと〝生まれたとき〟の体重——五万五〇〇〇tを維持している。五万五〇〇〇tというと非常に重いようだが、このような建造物としては記録的な軽さである。身長のほうはどうか？

ニコライ・ニキーチンの論敵たちは、地盤がひどく沈下する可能性があると主張した。だが、時間の経過は、設計主任の計算が正しかったことを示している。オスタンキノ・テレビ塔は、この点では何の心配もない。完成直後の数年、塔の基底部は8—10mmずつ沈下した。これは予定されていた数値である。その後、地盤は安定した。現在、沈下速度は年に1mmを超えない。にもかかわらず、塔の高さは大きく変化している。だが、これも計算どおりなのだ。高さはシーズンごとに変わる。暑い夏には数十mm伸び、冬には数十mm縮む。全ソ・ラジオ・テレビ送信所測地部が定期的にそれを極めて正確に測定して割り出す。

塔が垂直に立っていることは、理論的には非の打ちどころがない。だが実際には、塔はつねに揺れている。もちろん、肉眼ではそれは認められない。「塔は生きています」という技師長の言葉は、単なる言葉のあやではない。私たちにとっては動かないように見えても、塔は一連の原因によって絶えず複雑に動いている。中でも主な原因は風圧と太陽熱である。一九六八年と一九七三年に記録された垂直線からの塔の先端の最大のずれは、4・5mにも達した。計算では、12mまでのずれは異常とは見なされていない。

世界とつながって

高所作業班が仕事をしているところまで登るまえに、技師長は私にヘルメットとウインドヤッケを渡した。ヘルメットはふつうの帽子型のものだと風で吹き飛ばされてしまうので、頭をすっぽり覆う型のものだった。地上では、私たちは上空でどんな風が吹き荒れているか、考えることなどない。高所で仕事をする人々は、鳥のようにそれに慣れている。とはいえ彼らでさえ、保安技師が規定以上の風速が



◀アンテナを点検する高所作業班員



高速エレベーターに乗っての調整作業



テレビ塔の〝化粧直し〟



あると認めたときは、下で待機する。

三三七mの高さまで登るには、高速エレベーターでも58秒かかる。私たちはさらに、それよりもはるかに長い時間をかけて、塔の上部の金属製の部分に取りつけられた階段を歩いて登った。高所作業班の人々とのインタビューは、正直のところ、成功しなかった。このような条件のもとでは、人々は話に乗って来ない。彼らはテレビ送信アンテナの一つに、古い装置に代わって、新しいシステムを取りつけているところだった。

それは容易な仕事ではなかった。塔の基底部に降りて、私たちはテレビ送信ホールへ向かった。ホールは一つの階全部を占めていた。巨大なパネル、モニターが詰まった棚の列、ひと気がない清潔な部屋の様子は、大きな発電所の運転指令室のようだ。全ソ・ラジオ・テレビ送信所は半径一二〇kmの範囲の一三〇〇万人の住民に四つのチャンネルのカラー番組と、さらに広い地域にいくつかのラジオ番組を保障している。

高所での強烈な印象のあとでは、ホールの静けさと調整された微気候はとりわけ心地よく、会話もはずむ。会話の相手は2人のチェコスロバキア人技師——イルジ・ゴルヌィフとウラステミル・ブルジル。塔の新しい、5番目の送信アンテナ用設備の一部がコメコン内の協力協定にもとづいて、チェコスロバキアのテスラ・プラハ社から納入されて、この2人が組立てに参加しているのだ。

概して全ソ・ラジオ・テレビ送信所の専門家たちは、ソ連やコメコン諸国の関連企業と強い結びつきを持っている。なぜならオスタンキノ・テレビ塔は、ケーブルや中継ライン、ソ連の人工衛星によって、ソ連領内の95%の地域に番組を届ける仕事に参加しており、インタービジョンとユーロビジョンを通じて社会主義諸国や欧州諸国と番組を交換しているからである。

私がテレビ塔を辞したのは、もう夜だった。巨大な都市は眠りにつこうとしていた。技師長のおかげで、私はすでに塔を生きものとして感じることができるようになっていた。昼も、夜も。塔は長い生涯にわたって、ずっと目を覚ましたまま、1日じゅう動き、音もなく呼吸し、天に向かって電波を送るのだ。電波は私たちの遠い子孫たちの家にも届けられて、音楽や言葉や色鮮やかな映像を生み出すだろう…

眼下に広がるモスクワの大パノラマを尻目にゴンドラでさらに上へ……

ワルシャワ条約加盟諸国の政治宣言（要旨）

一九八三年1月4―5日、プラハでワルシャワ条約加盟諸国政治諮問委員会会議が開催され、条約加盟諸国の首脳が欧州情勢その他を現下の複雑な国際情勢に照らして共同で検討し、政治宣言を発表した。以下はその要旨。

ワルシャワ条約加盟諸国は、侵略勢力が一段と活発になった結果、世界の動きはさらに危険なものになっており、戦争の脅威、とくに核戦争の脅威が強まっている、と見なしている。条約加盟諸国は、現在の事態の進展をくいとめ、諸国民の宿願にこたえる方向に向けなければならないし、それは可能である、と確信している。

ワルシャワ条約加盟諸国政治諮問委員会（1月4―5日、プラハ）で採択された政治宣言は、核破局に代わる選択肢を提起し、文明と地球上の生命を守るために広範な国際協力を呼びかけている。

ブルガリア、ハンガリー、ドイツ民主共和国、ポーランド、ルーマニア、ソ連、チェコスロバキアの最高首脳が調印した宣言は、軍拡競争を抑制し、軍縮、とくに核軍縮へ移行する課題が、戦争を防ぐための闘争の中心であると強調している。

ワルシャワ条約加盟諸国は、ワルシャワ条約機構と北大西洋条約機構（NATO）間の軍事対決の水準を低めることを目的とした一連の措置を提案した。ワルシャワ条約加盟諸国はNATO加盟諸国に対し、相互武力不行使と平和関係維持にかんして条約を締結することを提案した。

宣言は次のように述べている――核兵器も、通常兵器も相互の間で先に使用しない、従って、武力全般を相互の間で先に使用しないという両同盟加盟諸国の相互義務が条約の核心となることができよう。この義務は、条約の全加入国の領土、さらには所在場所のいかんを問わず、全加入国の軍人と民間人、海上船舶、航空機、宇宙船およびその他、加入国に所属する施設に適用されよう。

条約はまた、対等の資格で加入を希望する世界の他の国々にも最初から開放されよう。

ワルシャワ条約加盟諸国は、兵力および軍備、特に核兵器の増強を停止することにかんする軍事諸大国間の協定が軍拡競争の終結に向かう大きな一歩になると信じている。ソ連と米国の戦略兵器の相互の量的凍結および戦略兵器近代化の最大限可能な制限は、この構想のより実質的な表現の一つになろう。

ワルシャワ条約加盟諸国は、段階的核軍縮計画の作成を提案している。条約加盟諸国はまた、次のことも提案している。

――核兵器実験の完全全面禁止条約をできる限り速やかに作成すること。

――化学兵器の禁止と廃棄にかんする国際条約の作成を速めること。

――中性子兵器禁止条約の作成に着手すること。

――あらゆる型の兵器の宇宙への配備禁止について遅滞なく交渉を開始すること。

――放射線兵器禁止国際条約の準備をできる限り速やかに完了すること。

――非核保有国の安全保障強化問題の解決を速めること。

宣言の一章は欧州の安全強化の問題を取り上げている。戦争の脅威を除去し、世界平和を強化する課題の大きな構成部分は欧州の平和を強化することである、それは何よりもまず核兵器と通常兵器の両方の膨大な量の兵器が欧州大陸に集中しているからであり、二つの軍事同盟の軍隊がここで直接対峙しているからである、と宣言は強調している。

これに関連してワルシャワ条約加盟諸国は特に、ヘルシンキ最終文書の共同で定式化され、完全に合意された原則と条項の重要性を強調し、これらは厳重に尊重され、終始一貫して実現されるべきであるとしている。

宣言は、一連の西欧諸国に米国の新型中距離ミサイルを配備するという決定をNATOブロックが実施に移そうとしていることで欧州諸国民にもたらされた、極めて深刻な脅威を指摘した。この決定は一九八二年12月に改めて下された。この決定の実施は信頼を減少させ、欧州大陸の情勢を悪化させるに違いない。

ワルシャワ条約加盟諸国は、最良の解決は欧州から中距離核兵器と戦術核兵器の両方の核兵器を完全に取り除くことであると信じている。条約加盟諸国は、この真の〝ゼロ〟決定が直ちに実現されなくとも、平等と同等安全の原則にもとづいて欧州の中距離核システムを抜本的に減らす道を選ぶのが時宜にかなっているという考えから出発している。この点で欧州の核軍備の制限に関するソ米交渉の意義は極めて大きい。プラハ会議は、一九八二年12月21日にモスクワで発表された諸提案におけるソ連の貢献を指摘した。

ワルシャワ条約加盟諸国は、北欧、バルカン半島、欧州大陸のその他の地域に非核地帯を設けようという提案、地中海を平和と協力の地帯に変えようという提案を支持した。条約加盟諸国はこれらの問題に関してしかるべき交渉を提唱している。

宣言には欧州の安全強化をめざすその他一連の提案が含まれている。特にワルシャワ条約加盟諸国が重視しているのは、マドリード会議がヘルシンキで承認された国家間関係の原則を尊重し適用するとの参加諸国の決意に立ち戻り、最終文書の字句と精神にもとづいて政治、経済、人文、その他の分野での協力を推進する措置を決定し、全欧会議参加諸国の次の会合の開催時期と場所の決定も含め、欧州の全般的プロセスとその組織的わく組みの連続性を強化することである。ワルシャワ条約加盟国はこの会合をブカレストで開催することに賛成の立場を改めて表明している。

ワルシャワ条約加盟諸国は、自国の権限にのみ属する諸問題へのいかなる外部からの干渉の試みも国際関係の公認の規準に反するものであり、そういう試みは今後も断固とした反撃に遭うであろうというポーランド人民共和国の立場を支持している。条約加盟諸国は米国および一部の西側諸国によって実施されたポーランドに対する〝制裁〟を強く非難する。ポーランドの内政問題は、これまでと同様、ポーランドによってのみ解決されよう。社会主義ポーランドは常に兄弟の社会主義諸国の精神的、政治的、経済的支援を期待できる。

政治宣言は、諸国間に信頼の風土をつくり出すためには、政治的対話を発展させ、経済および軍事分野での適切な措置を講じることに加えて、正確な情報を普及する必要があることを強調している。ワルシャワ条約加盟諸国は西側マスメディアによる中傷的報道を非難し、社会主義体制を虚報や中傷で破壊しようとする試みに成功する者はいないだろうと指摘している。

宣言はアジア、アフリカ、ラテンアメリカの情勢に多くの注意を払っている。宣言は、世界情勢の改善が、これらの地域における現存する軍事紛争を取り除き、新たな軍事紛争地帯の出現を防止することに大きくかかっていると強調している。

ルデー・プラーボ紙の質問に対するY・V・アンドロポフの回答

チェコスロバキアのルデー・プラーボ紙編集局はユーリー・アンドロポフ・ソ連共産党中央委書記長に対し、プラハで終了したワルシャワ条約諸国政治諮問委員会会議をどう評価できるかとの質問を寄せた。以下はこれに対するユーリー・アンドロポフの回答。

2日間にわたる共同の仕事は、社会主義諸国の間に確立された兄弟的伝統の精神に沿って行われた。われわれは国際情勢の進展に対する見解をつき合わせ、共同で将来の方針を立てた。これは、国際緊張の危険な増大を特徴とする現時点において特に重大な仕事である。

ソ連代表団は、会議で行われた審議が実り多く率直なものであった点を高く評価する。団結、相互理解と対外政策活動の深まりをめざす意欲が会議で支配的であったのは、重要なことだ。

われわれは世界情勢を冷静に判断しており、NATOの戦争準備を不安に思う気持を隠してはいない。しかし、八〇年代初頭にあらわれた否定的現象にもかかわらず、社会主義共同体の国際的地位は依然として強固で確実なものである。このことを全く明確に強調しておきたい。

欧州の安全強化、世界の政治的雰囲気の健全化をめざして一歩一歩進んでいこうとする善意と決意を、われわれは十分にもっている。帝国主義の軍事的脅威に対抗する力を十分にもっている。

われわれの同志的な意見交換の全体から引き出される主要な結論は、次のように言い表わすことができるだろう。社会主義に圧力を加えようとする侵略的な帝国主義層のもくろみに応えて、われわれの統一、われわれの経済力と防衛力を一層強化しなければならない。われわれ諸国の安全も、平和の運命全体も、これと直接に結びついていると言ってよい。

ソ連について言うなら、兄弟諸国との友好を固め協力を発展させる問題は、ソ連の国際政策でつねに特別の、優先的な地位を占めてきたし、今後も占めていくだろう。

この機会を利用して、グスターフ・フサーク同志とチェコスロバキアの同志のみなさんに、心温まるおもてなしと会議の活動のためにつくっていただいた条件に対し、ソ連代表団長として心から感謝の念を表明したい。

チェコスロバキアの共産主義者、すべての勤労者のみなさんのために、新しい年における御多幸を希望する。

（プラハ、1月5日発タス）

1983年を迎えて

――プラウダ論説――

新しい一九八三年がやって来た。ソ連の人々は良き習慣に従い、成功、幸福、喜びを願いつつ、新年を迎えた。ソ連共産党中央委員会、ソ連最高会議幹部会、ソ連閣僚会議はソ連国民に新年の祝詞を述べた。

われわれは〃古い〃年に別れを告げるとともに、昨年何を体験したか、昨年どのような意義深いことがあったかを、頭の中で反すうした。われわれはソビエト社会主義共和国連邦結成の栄えある記念日を、全国民的な一大祝日として祝った。ソ連邦の誕生以来の60年間は、社会主義の偉大な成果、レーニン的民族政策の勝利、ソ連のすべての民族の固い友好と兄弟愛の感動的デモンストレーションであった。

われわれは当然ながら胸を張って、一九八二年にやってのけたことやわれわれのすばらしい成功を思い起こすと同時に、完全に実現できなかったことや新たな努力を要求していることをも忘れてはいない。各人は新年にあたって思いをめぐらし、ことしはどんな年になり、何がもたらされるだろうかと思案した。

一九八三年は5カ年計画の3年目の年である。その課題は、ソ連共産党中央委員会11月（一九八二年）総会やソ連最高会議第7会期の諸決定によって決められている。新年度の国家計画はソ連共産党の社会・経済戦略に従って策定された。

一九八三年度のわが計画の特徴と言えるほんの幾つかのデータを示そう。労働生産性（経済効率の主要な指標）の伸び率は年間3％以上になり、経済発展テンポはスピードアップする。燃料・エネルギー・コンプレクスの発展に力点がおかれる。今年の建設計画は大規模である。また計画には、新しい種類の製品開発にかんする一〇〇〇以上の課題、三〇〇〇以上の新製造技術の導入にかんする課題と生産の機械化・自動化措置が上がっている。労働者、職員の月平均賃金やコルホーズ員の労働報酬が引き上げられよう。子供を持つ世帯への国の援助が強化される。小売商品売上高が増える。総面積一億六〇〇〇万平方m以上の住宅が完成する。

要するにわれわれの前途には仕事が山積しており、すべての人々は張りつめて働き、高度の組織性と自覚した規律を発揮しなければならない。いろいろな課題は、われわれにとって解決できるものである。新年のメッセージの中でソ連共産党中央委員会、ソ連最高会議幹部会、ソ連閣僚会議は、ソ連のすべての人々が一九八三年を新しい栄えある成果をもって記念し、レーニンの道に沿って国を一層成功裏に前進させるだろうとの信念を表明している。自己の良心的な、献身的な労働によってソ連の経済力と国防力を強化し、科学と文化を発展させ、われわれの偉大な祖国の一層の繁栄に寄与するすべての人人に名誉と光栄あれ！

ことしの仕事の成功は、多くの諸要因に左右されるだろう。党、ソビエト、労働組合、コムソモールの諸組織は、諸要因をよく見て、新年早々から勤労集団の注意を重要方向に集中させ、新しい、先進的なものを極力支持し、先進家や革新運動者――社会主義競争の先頭に立っている人々の経験を広めなければならない。最重要課題は、今後とも人々の積極性を伸ばし、一人一人に、依託された仕事に対する高い責任感を植え付け、生産における労働規律、秩序を強化することである。だれもが、「われわれすべてが良く働けば働くほど、暮らしはますます良くなる」という単純な真理を良く理解しなければならない。

われわれは地上の恒久平和を願いつつ、新年を迎えた。われわれの平和を願う志向は不変である。ソ連は、自国の対外政策の平和愛好諸原則と諸目的にあくまでも忠実であり、核戦争の脅威に反対し、軍拡競争の抑止をめざしてねばり強く闘っている。社会主義兄弟諸国や世界のすべての平和愛好勢力はわれわれとともにある。

「……ソ連は平和の維持と強化を望んでおり、このために、増大する核戦争の脅威を取り除き、核軍備を管理下に置き、核軍拡競争を中止させることほど、いまや国際政治における重要な課題はないことを良く自覚し、できる限りのことをしている」と、Y・V・アンドロポフ・ソ連共産党中央委員会書記長は新年を前にして指摘した。

わが国はつねにあらゆる国と平等・互恵の協力を行う用意がある。国際情勢に見られる現在の困難と緊張は克服されうるし、また克服されなければならない。同時にわれわれは最大の警戒心を発揮し、われわれとわれわれの同盟諸国の国境の不可侵性を確実に保障するだろう。

ソ連の人々は確信をもって将来を見つめている。党と国民の揺るぎない統一こそ、わが社会主義祖国の一層の成功の保証である。一九八三年はわが祖国の経歴に新たな輝かしいページを付け加えるだろう。

（プラウダ、一九八三年1月2日号。一部省略）



ソ連を横断した〃平和の列車〃

本誌記者 レオニード・チャプルイギン

昨年10月末、太平洋岸の港湾都市ソビエツカヤ・ガバニから、ソ連の青年たちの〃平和列車〃が出発した。平和列車は12月17日にソ連西部国境の都市ブレスト（英雄要塞都市）に到着するまで、計一万八〇〇〇kmの距離を走破、七つの時間帯を横切り、約40の都市を訪れた。

この超長距離〃リレー〃は、ソビエト青年のイニシアチブにより「ソビエト青年の平和行進」（一九八二年春の全ソ・レーニン共産青年同盟第19回大会で提唱された全ソ的長期行動）のわく内で催されたもの。このイニシアチブはソ連全国で支持された。列車自体はシベリアのイルクーツク市の鉄道機関庫の青年労働者が準備し、鉄道員が列車の運行の手配をした。

平和列車の〃乗客〃の中心は、ソ連各地の労働者、学生、若い技師や医師、俳優やスポーツマン、青年諸団体の代表たち。これに旧参戦軍人、古参労働者、老世代の芸術家など、戦争がいかに恐ろしい悪であるかを肌身で体験した人々が加わった。

列車が通る各都市では、何千人もの青年男女が列車を出迎えて、大衆集会やデモ行進、旧参戦軍人との会合、ポリティカルソング・フェスティバルやコンサート（収益金はソ連平和基金に寄託）などを催した。キャンペーンに参加した多くの都市の青年労働者たちが、1日分の賃金を平和基金に寄付することを決めた。列車の通る全コースで、平和に暮らし、戦争の脅威に反対して闘うことを世界の人々に呼びかけたアピールの署名運動が行われ、数百万人の署名が集まった。集まった署名は、国連本部に送られる。署名運動は、バルナウル市（シベリア）の青年労働者の提唱によるもので、第2次世界大戦時のソ連の戦没者数二〇〇〇万人が目標である。コースに当たった諸都市の街路には、軍拡競争の停止や世界の恒久平和の保障を要求する数多くのポスターが見られた。

ハバロフスク市の中央広場で開かれた大衆集会では、ハバロフスク地方の青年たちの国連あての次の呼びかけが読み上げられた――「われわれ青年は明日がどうなるかを心配している。戦争や軍拡競争のマニアによって、明日という日が脅かされるのを望まない。武力と狂気の勢力の行く手を阻もう！　平和を爆破させてはならない！」

この情熱的な呼びかけは、すべての諸都市のすべての発言の中で鳴り響いた。

戦争がどんなものかは、年齢にかかわりなくすべてのソビエト人が知っている。ソ連のほぼ全世帯が、第2次世界大戦で肉親や親類の者を失った。だから戦争と平和の問題は、ソ連の若い人の関心事とならざるをえない。

建設中のバイカル・アムール鉄道の〃首都〃ティンダの集会で若い労働者コンスタンチン・ボロノフは次のように述べた――「地球のさまざまな地域で血が流されていることの緊張した国際情勢のもとで、われわれは平和を守り通すことができるし、守らなければならないと確信している。太陽の明るい光を核爆発で覆い隠さないための闘いが、われわれ仲間の目的となった。世界中がわれわれの声に耳を傾けてくれることを！　われわれは自分の幸せだけでなく、世界のすべての諸民族の幸せを願う。幸せ――それは平和である！」

セルゲイ・ウーリン・ソ連青年団体委員会副議長のことばを借りれば、ソ連の青年はこの〃平和行進〃を、世界民主青年同盟の「核の脅威に反対し、平和と軍縮をめざす民主青年の世界行動」キャンペーンの一環ととらえている。

ソ連ではここ数年間に、数百万人の青年が反戦集会に加わり、ソ連平和基金の募金、デモ行進、ポリティカルソング・フェスティバルに参加した。こうしたすべての行動を貫く基本理念は、言うまでもなく平和の擁護である。

▲こうした署名運動が平和列車の通る先々で行われた。

アフガニスタン問題に関するタス声明

（一九八二年12月31日）

最近、主として、民主アフガニスタンに対する宣戦布告なき戦争を遂行している国々の一部の政治家および報道機関は、ソ連の対アフガニスタン政策に関して、ありとあらゆるデマを広めている。しかも、米国の、米国だけとは限らないが、一連の公式筋の人物はソ連と主権国家たるアフガニスタン民主共和国政府に乱暴な攻撃をあびせかけている。彼らはアフガニスタンで起こっている客観的プロセスの実態を悪意をもって歪曲し、友好的隣国に対するソ連の国際主義的援助の性格をゆがめて伝えている。

アフガニスタンでの一九七八年4月の民族民主革命が、アフガン社会の当然の発展の結果であったという事実が故意に無視されている。この革命は国民の意思を表わしていた。もっぱら国民だけの意思をである。デマの作者たちはいったいこのすべてを知らないとでもいうのだろうか。

最初の段階ではアフガン革命は自力で敵対勢力から自らを守った。しかし帝国主義と反動が民主アフガニスタンへの大がかりな干渉を始め、領内に武装暴徒部隊が送りこまれ、国民の革命による獲得物が直接の脅威にさらされるに及んで、アフガニスタン民主共和国政府はソ連に対し軍事援助を含む援助を要請した。ソ連指導部は、友好善隣協力条約に従い、また、自国の南部国境の安全確保に関心を払う立場に立ち、この要請に前向きに応えた。

ソ連政府は、限定された兵員は一時的にアフガニスタン民主共和国に導入されたものであること、外部からの干渉が停止されれば直ちに撤退することを再三にわたって言明してきた。しかしながら、西側諸国やその他の一部の国々の支配層は、以上のことを知らないようなふりをわざとしている。

一見したところ、アフガニスタンの主権とソ連軍のそこからの早期撤退をあれほど主張している人たちは全員、干渉の停止をめざす措置を講じるはずだと思われた。ところが実際には逆のことが起こっている。一部の大国は、ソ連軍がアフガニスタンにできるだけ長くとどまるようにすることに関心を抱いているかのような行動をとっている。

ソ連ではなく、帝国主義諸国、どこよりもまず米国と対アフガニスタン侵略の加担者である他の一部の国々こそ、当該地域の紛争状態に対する直接的責任を負っているのである。ほかならぬこれら諸国が暴徒部隊を組織し、訓練し、武装させ、最新兵器を提供している。ほかならぬこれら諸国がアフガニスタン領内に破壊工作・テロ集団を送りこんでいる。そしてこれはすべて主権国アフガニスタンにホコ先を向けて行われているのである。あらゆる国際法規からみても、このような行為は侵略とみなされる。これらの行為に別の定義を下すことはできない。

現実は以上の通りである。そしてそれはいかなる偽りの声明をもってしてもおおい隠せない。

先日米国大統領は、すでに何度目かになるが、ソ連がアフガニスタンで化学兵器を使用しているかのように主張した。これはみえすいた中傷である。これはソ連によって公式に否定された。それは、国連の委員会の専門家報告の結論によって否定されている。その結論はこれを裏づけることができなかった。なぜなら、アフガニスタンでも、世界の他の地域でもソ連が化学兵器を使用した事実は一つもなかったし、今もないからである。

アジアと中東でのソ連の侵略的意図に関する米政府の声明も同じく不条理だ。これは汚ない政治的思惑にほかならない。

米国とNATO筋では、アフガン問題を対ソ関係の性格とリンケージさせようとすることが珍しくない。デタントをぶちこわし、自らの軍国主義的計画を正当化するためにこれを利用している者すらいる。

ソ米間、東西間の関係発展を、アフガニスタンをめぐる事件に従属させようとする試みは驚きと糾弾を呼び起こさないわけにはいかない。このような試みは誰を対象としているのだろうか。その影響を受けてソ連が民主アフガニスタンやその合法政府に対する立場を変えると、本当に考えているのだろうか。はっきり言おう。そういう期待は幻想である。ソ連は、外国の軍事干渉からアフガニスタンを守る上での自らの国際主義的義務を最後まで果たすであろう。

ソ連は自国の軍隊をアフガニスタンに永久にとどめておくつもりはない。この点についてははっきり言明してきた。ソ連の限定された兵員は将来アフガニスタンから撤退する。だがそのためには、アフガニスタンに対する外国の武力干渉が停止され、干渉をくり返さないという確実な国際的保証が確保されなければならない。

アフガニスタンの一連の近隣諸国もそうだが、米国政府には、言葉ではなく、行動によって、アフガニスタンをとりまく緊張の一掃への関心を示す可能性がある。政治的調整をめざす道は開かれている。その原則が一九八〇年5月と一九八一年8月に出されたアフガニスタン民主共和国政府の提案に含まれている。国連事務総長の特使を通じて開始されたアフガニスタン・パキスタン交渉は政治的調整に質的な変化をもたらすことができる。しかしそのためにはアフガニスタン民主共和国政府と真剣に交渉を進める必要がある。

ソ連政府の人道的な決定

ソ連政府は、ソ連国境侵犯とソ連領海での不法操業のかどによりソ連で服役中の全日本市民を釈放することに決定した。この決定は、同じような罪を犯して現在取り調べ中の日本の漁民にも適用される。

ソ連邦結成60周年にちなんだこの恩赦は、ソ連政府の人道的な態度と極東の隣国日本との善隣関係の強化をめざすソ連の志向を、あらためて証明した。

ソ連は平和共存と対日善隣の原則に忠実であることを、繰り返し証明してきた。ソ連側は漁業を含む二国関係のさまざまな面で、数多くの善意の行為を行った。たとえば、ソ連のシグナリヌイ島沿岸のコンブ漁に関する協定を挙げればよく分かってもらえよう。ソ連は一九八一年にコンブ漁の許可の更新を求めてきた日本側の要請を容れて、一般日本人、まず第一に漁民の必要に深い理解を示した。

毎年のソ日漁業交渉でソ連代表団は、互いに取り決めた操業規則、法規の厳守を条件に両国の漁民が互恵の協力をする用意があることを繰り返し強調した。とくにこれらの法規は、一九七六年12月10日付けのソ連最高会議幹部会令「ソ連沿岸に接続する海洋区域における生物資源の保護と漁業規制に関する暫定措置」の諸条文を土台にしている。日本側はこれらの法規を公式に承認しており、それは一九七七年5月、当時の農水相鈴木善幸氏が新しい条件でソ日間の北西太平洋における漁業協定に調印したことで証明されている。

しかしそれにもかかわらず、ソ連領海内で不法操業が行われてきた。サハリン州の漁民は、日本の密漁者について苦情を述べた。ソ連の関係機関もそれに対して日本側の注意を喚起した。

最も悪質な違反者に対してはソビエト法に従って抑留後相応の処罰措置がとられた。

ソ連政府はソ連で服役中の日本の漁民を釈放するとともに、今後このような違反を許さないように、日本側に呼びかけた。ソビエト法ならびに互いに取り決めた規則が厳守されれば、海洋資源を最も完全に、互いの利益になるように利用できるだけでなく、ソ日両国民の相互理解の強化にも役立つだろう。

日本向けモスクワ放送の時間と周波数

A＝'83年３月５日まで
B＝'83年３月６日から

放送時間（日本標準時）	7：00～7：29		18：30～18：59		19：00～19：59		20：00～20：59		21：00～21：59		23：00～23：59	
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
周波数（メガヘルツ）		11.81		15.45	左に同じ		左に同じ			15.45		15.24
	9.78	9.78		12.01						15.24		11.81
	7.34	7.23		11.81						12.01	7.34	
	7.17	7.17	9.69	9.69						11.81	5.94	
	6.11			9.54					9.69	9.69	1.25	1.25
	5.96	5.96	7.34						9.54	9.54	0.72	0.72
	1.25	1.25	7.26						7.34		0.63	0.63
	0.72	0.72	7.15						7.26			
			5.96	5.96					7.15			
			5.94						5.96	5.96		
			1.25	1.25					5.94			
			0.72	0.72					1.25	1.25		
			0.63	0.63					0.72	0.72		
									0.63	0.63		

ドジンカ港のクレーン運転手エブゲニー・ムラビヨフ



夏の白夜、私はドジンカ行きの船を待っていた。イガルカはもう夜半すぎだと言うのに、白味を帯びた太陽の輪がまだ空にかかっていた。シベリアの大河エニセイを北に二〇〇km下り、12時間後には私はドジンカに着いているはずだった。

だが、運が悪かった。タイミル半島の〝首都〟ドジンカまでヘリコプターで行くことになってしまった。飛んでみて納得がいった。川の旅が出来なかったことを残念がるには及ばなかったのだ。ちょっと下を見ただけでも北極圏内の果てしないツンドラが見える。エニセイ川のゆるやかなカーブが目で追える。中でもきれいだったのは丸い、受け皿のようなツンドラの湖だった。それら、大きい湖や小さい湖は、草や花々、こけの鮮やかな緑、時にはまばらな低木、曲がった育ちの悪い木々で

エニセイ下流の港町 ドジンカ

本誌特派員　アレクサンドル・トロプキン

カメラ　A・セミョーヒン



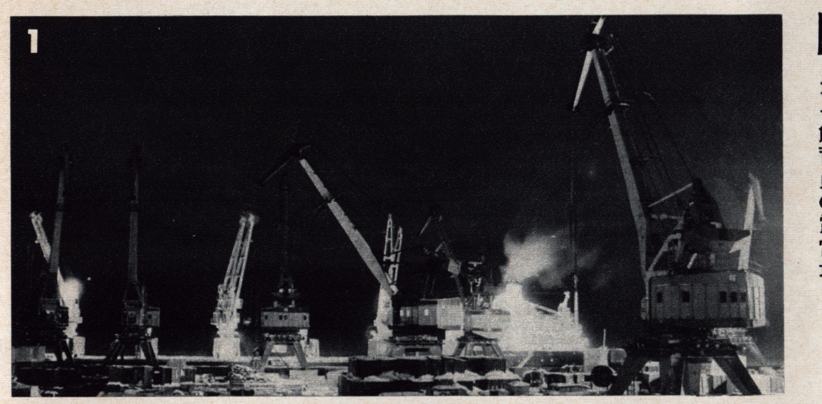
ソ連めぐり





北極海経由でドジンカ港に着いた船

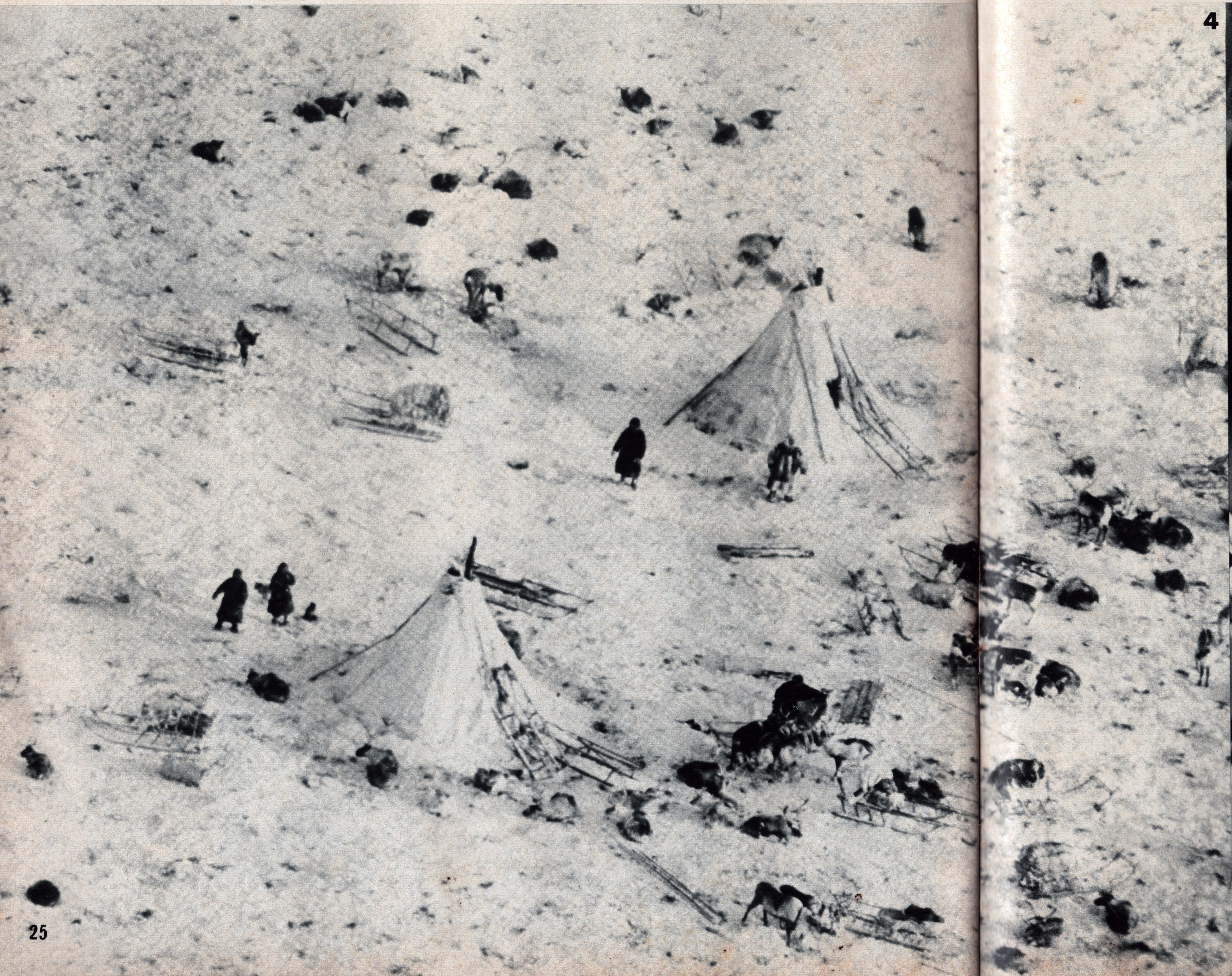
1　夜となく昼となく作業が続くドジンカ港
2　タイミル自治管区人民代議員ソビエト執行委員会議長のニコライ・ソトニコフは原住少数民族ドルガン人の出身。
3　ドルガン人の民族詩人エブドキア・アクショーノワ
4　ウスチ・エニセイ地区の「ザリャー・タイミラ」(タイミルの朝やけの意）ソフホーズのトナカイ飼育員の露営地



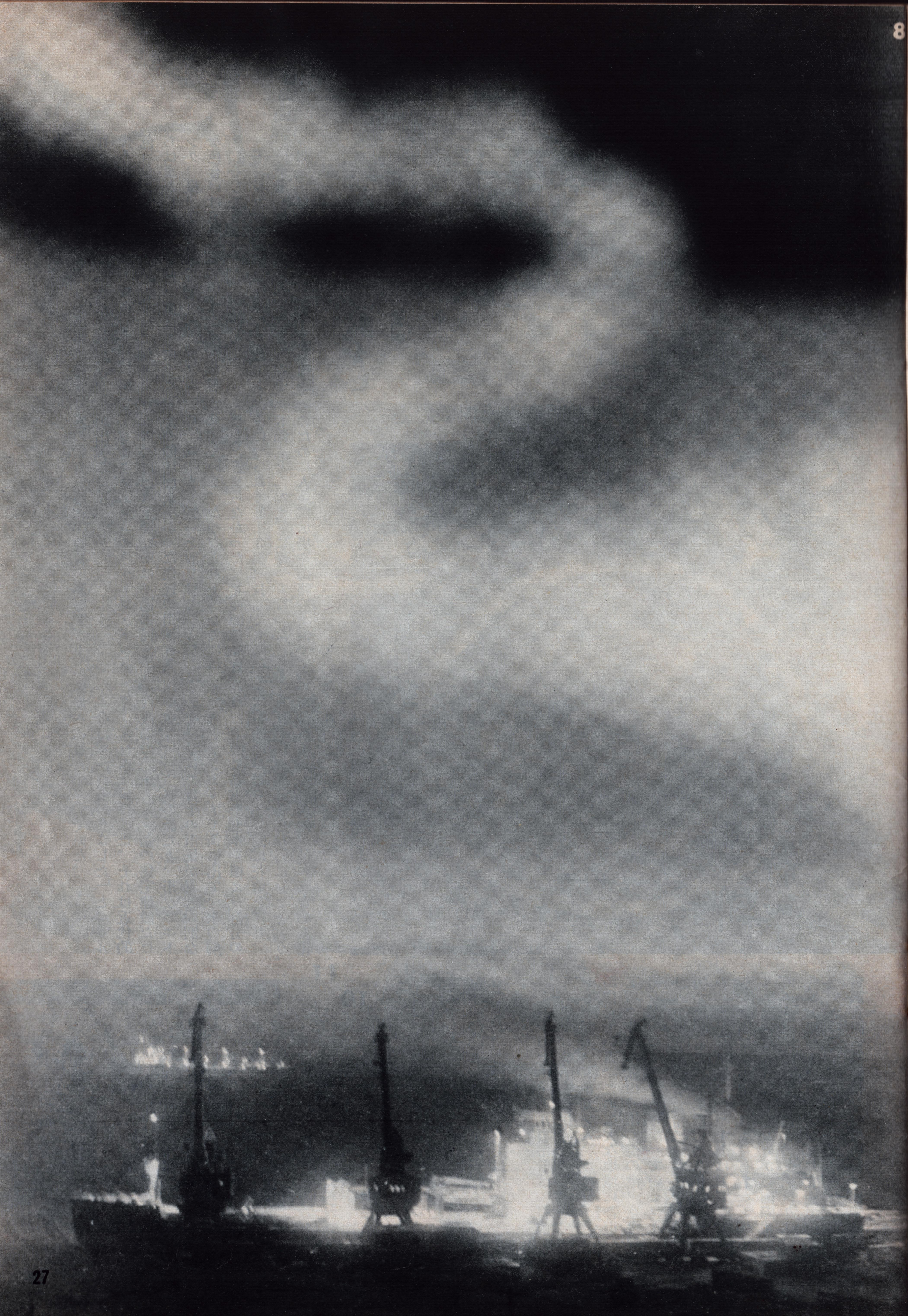


縁どられていた。ツンドラは机のように平らですべすべしていた。北へ行くにつれ、ツンドラの平原には何千頭というトナカイの群れが放牧され、毛皮の美しいホッキョクギツネ、キツネ、オコジョが生息している。ツンドラには鳥も多く、湖や川に魚が沢山いる。
　エニセイ川がアジア最北の半島に近づくと、その川床を著しく押し広げるのが上空からはっきり分かった。川幅は6—7km。相当に厳しい風景の細部も、すべてその規模は実に壮大だ。この未開に近い広大な土地に整然とした都会の街区が見えた時はうれしかった。ドジンカに近づいていた。
　毛を逆立てたようにブームを上げた何百台というクレーンが並ぶ港は、このまちの顔、性格、まちの主な仕事の種類を明らかにしている。港はこのまちの最大の見どころだ。数kmにわたっ





8



って川岸に伸びた港は船舶の航行が活発な時期には昼となく夜となく、何百万tもの貨物を処理する。鋼材や工作機械から南のブドウの入ったきゃしゃな箱まで貨物の種類は実にさまざまだ。この港は一日に数十隻の河川用ばら積み船とはしけ、同じく数十隻の、北極海航路を通ってドジンカに来た航洋船を受け入れている。ドジンカと隣接する北極圏最大の都市ノリリスク、その衛星都市数市が〝本土〟からのあらゆる必需品をドジンカ港経由で確保しているのだ。しかも大部分の貨物は短い夏の航行期に集中的に入って来る。冬の凍った川や海を、厚さ何メートルもの氷を越えて航行するのは夏季の一〇〇倍も困難なことなのだ。夏の間、ドジンカ港で無数の車両、コンテナ、船倉への貨物積み込み作業が猛烈なピッチですすめられるのも、つまりはそういうわけなのである。

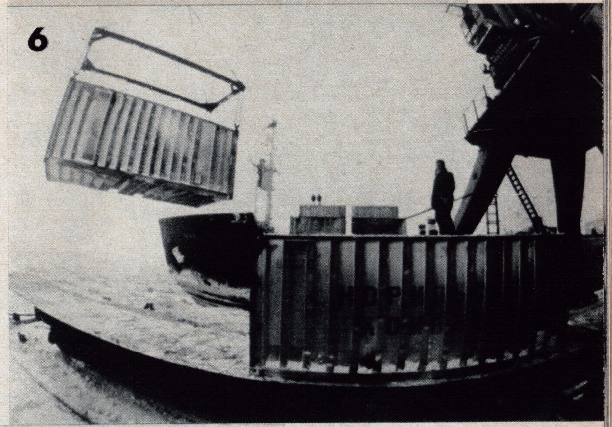
現在ドジンカは、まちの改造と整備に真剣に取り組んでいる。昔の老朽化した木造家屋にまちはきっぱりと別れを告げ、木造家屋が取り払われた後にはれんが造りやパネル建築の高層住宅が建てられている。くいをうつ衝撃が足の下で文字通り大地を揺るがす。基礎がためのくいが地中12mの深さに打ち込まれているのだ。ここではこれが信頼できる建築物を建てるための唯一可能な方法なのだ。

ドジンカは永久凍土の上にある都市だ。そのため普通の都市では地中に隠れている水道、ガス、地域暖房配管など各種の都市設備網を地表に露出させて張りめぐらさざるを得ない。現在、これらの配管には徐々にコンクリートの〝着物〟が着せられており、その路線が街路を彩っているといってもいい。

5



6



7



5 ドジンカ港の沖仲仕たち
6 コンテナの陸揚げ作業
7 ドジンカ市第1中等寄宿学校で5年生を教えているタマラ・パリチナ先生
8 タイミルの空を彩るオーロラ



つい最近までドジンカの街路は並外れた単調さに特徴があり、どこへ行っても住宅と公共建物の灰色レンガに灰色コンクリートだったそうだ。今、まちはまぶしいばかりだ。黄色や白、ピンク、緑、空色の家々。このカラフルな色合いは気分を明るくし、まちを若々しくしている。

ドジンカには毎年、快適なアパートが何十棟も建てられている。まちの中心部は完全に一新し、デパートや映画館の新しい建物、数棟の高層アパートが出現した。

レオニード・コルネーエフ・ドジンカ市長は、今重要なのは、過去何十年かの間に出来上がった住民の出稼ぎ気分、仮住まい気分を取り除くことだと考えている。かつて人はドジンカには長くとどまらなかった。北極圏の高賃金につられて2－3年、長くても5年も働くと〝本土〟に帰って行った。そのために人々は広場や街路の不備や不便さに目をつぶっていた。

「今は状況が変わりました」と、コルネーエフ市長は言った。それは近代的な設備の完備した大量の住宅建設だけではない。市長の話だと、市ソビエトの呼びかけで数千の市民が老若の別なく、ボランティアで街に出て、氷の解けた地面に高木や低木を植え、自分の住む団地の庭や辻公園に花壇を作り、それぞれの地区をきれいにしたという。

市長は市民の心理的気候の漸進的変化を示すもう一つの例を挙げた。それは毎年四〇〇人の小さな市民が増えていることだ。これは昔よりもはるかに多い。

ドジンカはタイミル自治管区の行政中心地で、北方少数民族のネネツ人、セリクプ人、ドルガン人、エベンク人が住んでいる。この広大な地域に都市、工場、各種の鉱山、川や海の港、空港、何万頭ものトナカイを飼っているコルホーズ、漁業アルテリ、毛皮獣飼育場が出現した。工業都市ノリリスク産のニッケル、銅、コバルトはドジンカから全国に積み出される。有名なシベリア産毛皮もここドジンカから国際オークションに出荷される。ドジンカは北極海船団の運行を調整し、北極海沿岸や大陸棚でガス・油田探査を行う地質調査隊の基地になっている……





9　北方少数民族の民芸品が並べられたドジンカのみやげ物店

10　ドジンカ文化宮殿のアマチュア・アンサンブル「ヘイロ」が演じるトナカイ飼育者の踊り

11　タイミル民芸品合同の木彫り師セルゲイ・トルホフ

貿易は善隣の基礎

——ソ日通商条約締結25周年でスシコフ・ソ連貿易次官が記者会見


記者会見でソ日貿易・経済関係について語るスシコフ貿易次官

一九八二年12月6日は、ソ日通商・経済関係の条約・法的基盤をつくったソ日通商条約の締結25周年に当たった。一九五六年10月19日調印のソ日国交回復に関する共同宣言に従って締結された通商条約は、一般に認められた国際的な基準と原則、まず第一に両国の貿易・海運の分野における最恵国待遇の相互許与を土台に、現行の両国間の通商・経済関係の基本条件を定めた。ソ日通商条約は、その後のソ日貿易支払い協定、定期空路、航路の開設、沿岸貿易、経済・科学技術協力関係の諸協定の締結などの道ならしをした。

ソ日通商条約締結25周年を記念してモスクワで行われた記者会見でV・N・スシコフ・ソ連貿易次官は、これまでの互恵のソ日通商・経済関係の発展を評価し、ソ日通商条約の締結が両国の貿易の発展と新しい形の経済交流の出現を促したと述べた。ソ日貿易額は一九五八年の三四〇〇万ルーブルから一九八一年の三〇億ルーブル強に成長した。一九七六—八〇年の5カ年だけでも貿易額は一二〇億ルーブル以上、つまり前の5年間の2倍に増えた。

長らくソ連は、用材、カリ塩、綿花、数種の非鉄金属の対日輸出国の3本柱の一つであるが、逆にソ連は日本にとって、大径鋼管をはじめとする一部の鉄鋼製品や化学工業用などのプラントの大きな販売市場であった。

一九六〇年代の中頃から始まったソ日双方の相互経済協力はとくにめざましい発展をとげた。現在までにすでに四つの共同プロジェクト——二つの極東森林資源開発基本契約、ウォストーチヌイ港第1期工事分建設基本契約、チップ・パルプ長材基本契約が実現している。南ヤクート原料炭開発、極東およびバム（バイカル・アムール鉄道）地帯隣接地域の第3次森林資源開発、サハリン島陸棚石油・ガス探鉱などの大型プロジェクトも実現段階に入っている。このような協力を通じて日本の会社は、大量の機械、設備、資材をソ連に安定輸出でき、ソ連から木材や燃料・エネルギー原料を確実に輸入できる。またこの協力は、シベリアと極東の経済的発展の促進を促す。従って協力は双方に有利である。

V・N・スシコフは日本の中小商社を相手とする貿易での成功を指摘した。これら中小商社はソ日経済関係のパイオニアであったし、現在最も活発で弾力性のある貿易商社グループである。ソ日貿易における中小商社の影響力は年々増大している。一九七〇年代の半ば、ソ日貿易全体に占める中小商社の

割合は15%であったが、一九八一年には25%にもなった。二国間貿易に積極的に参加している一三〇社余りの中小商社の中でも一番目立った存在は、現在53社が加入している日ソ貿易協会である。日ソ貿易協会加入商社の一九八一年の取引額は、二億三〇〇〇万ドルだった。ソ連は日本のこのグループの商社との協力に大きな意義を与えている。

要するに、通商および経済協力で達成した実績は、ソ連と日本が重要な貿易パートナーとなっていること、また今後の貿易関係の発展がソ日両国の経済的利益に応えるものであることを証明している。

V・N・スシコフはソ日貿易・経済関係の発展の見通しについて触れ、貿易計画をも含めて、現在、第12次5カ年計画期（一九八六—九〇年）のソ連の経済発展計画が作成されていると強調した。もちろん、これら予備案は今後まだ審議が続けられ、煮詰められるわけだが、現在すでに、ソ日通商・経済関係の進むべきおよその方向を読み取ることが出来る。

それは一九七九年の第8回ソ日・日ソ経済合同委員会ですでに取り上げられた鉄鋼分野の協力であり、シベリアおよび極東の原料炭開発（石炭液化および消費地へのパイプ輸送も含む）、サハリン島陸棚石油・ガス共同探査の継続である。将来はサハリンにガスの液化・輸送施設の建設が計画されている。ソ連ではロボット技術の発達が重視されており、産業ロボット生産の協力も今後取り上げられよう。

ソ日経済協力の組織形態も改善されよう。ソ連は、主として中小商社が推進しているコンペンセーション（相殺）方式を基盤にした、いわゆるミニ・プロジェクトの実現を目ざすかなり多くの提案を受け取った。相互協力のこの方向は大きく発展するだろう。しかしミニ・プロジェクトが実現しても、ソ日間の大型の長期協力の意義は低下しない。

一九八三年2月、経済代表団（団長は永野重雄・日ソ経済委員会代表委員）をソ連に派遣するという日本側の決定を、V・N・スシコフは肯定的な一歩として評価した。日本代表団の訪ソのさい、代表団の構成を考慮し（大手商社、中小商社の代表約二〇〇人）、双務的通商・経済関係の当面の問題および将来の問題が審議されよう。この会合では、日本商社の多くの提案についての双方の意見が出されるので、ソ連の貿易の今後の計画策定の過程でこれらの提案を考慮に入れることができよう。

この3年間に、ソ連側の責任ではないのに、ソ日貿易の成長テンポがはっきりと低下しているので、この会合は大変重要だ。〝政治化〟の結果、日ソ通商・経済関係は、第8回合同委員会で話し合われた新たな大型プロジェクトに関する協力を含めて、凍結された。この新大型プロジェクトが実現すれば、今後の貿易発展の基礎になったであろう。凍結の結果日本は、ソ連の対先進資本主義諸国貿易の第2位から第5位に落ち、もう3年間も5位のままである。

しかし、V・N・スシコフは、ソ連の対日、対西側貿易の規模と成長率の低下は、おそらく、ソ日経済関係が新たな、より高度の質的水準まで上がらなければ、近い将来もそのまま残るだろう、と強調した。主要な西欧諸国とソ連が結んだような型の経済協力の原則に関する長期の政府間協定は、貿易を新しい質的水準に引き上げる措置だとソ連側は考えている。

両国の貿易の発展を妨げる人工的障害を除去し、貿易を真に安定した長期のものにすること——それが日本をソ連のしかるべき貿易相手国に復帰させる重要な前提である。

最後にV・N・スシコフは、ソ連は貿易と経済協力を、デタントと国家間の信頼を強化する有効な手段であると見ていると述べた。ソ日通商・経済関係の幅広い発展は、ソ日間の堅固な、真の善隣関係を築く確実な基盤になろう。

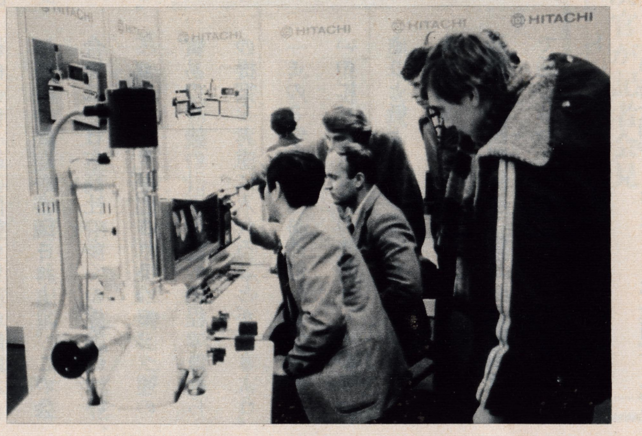
ソ連市場への高まる関心

——〝エレクトロンマシ'82〟展

昨年11月30日から12月9日まで、モスクワで国際見本市——第3回〝電子機器製造設備展〟（〝エレクトロンマシ'82〟）が開かれた。



▲「エレクトロンマシ'82」の会場



日立のコーナーには電子顕微鏡が展示された。

モスクワで開催されるこの展示会の人気は、各種電子技術関係の多くの外国企業の間で年々高まっているが、そのことは経済制裁や人為的規制が、ソ連と西側諸国間の貿易・経済関係の発展を阻止できないということを改めて裏づけている。西側の諸企業はソ連市場に対して、ますます大きな関心を示している。

一九七〇年に第1回〝エレクトロンマシ〟展が開催されてから12年たつが、その間、参加外国企業・機関数は数十（一九七〇年）から一〇〇（一九七三年）、そして今回の二八〇へと増加した。展示総面積も一九七〇年の一〇〇〇平方mから一九八二年の六五〇〇平方mへと著しく拡大した。

モスクワのクラスナヤ・プレスニャにある総合展示場の第一パビリオンに展示されたのは写真製版装置、薄膜蒸着用真空装置、電子光線・イオン光線装置、オプトエレクトロニクス装置、半導体機器、IC製造設備、量子エレクトロニクス装置、低温技術装置、体温測定レーザー装置など14の先進工業諸国が出した二〇〇〇点余りの製品。

現在、エレクトロニクス製品生産工程の主流は、手動・半自動生産から完全自動生産へと移行しており、これはソ連の展示品にもよく現れていた。〝テフマシエクスポルト〟（全ソ技術機械輸出公団）は、LSI・超LSI製造用技術設備のシリーズを展示した。この中にはICのパターン焼き付け装置とシリコン・ウエハのマスクの完全自動焼き付け装置が含まれている。IC自動組立設備も数多く展示された。

これら広範囲の充実した出品をしたのは、オーバーシーズ・マーケティング社とアムテス社（英国）、アーガス社（米国）、コメフ社とシット・アルカテル社（フランス）、ノベア社、エルンスト・ライツ社、サルトリウス社、ライボルト・ヘラウス社（以上西ドイツ）、東京貿易、丸紅、国際交易などの商社である。



▼入場者に自社製品の説明をするキャノンの梶原泰明氏(右)と丸紅の南潤一郎氏

最も大規模な出品をしたのは西ドイツで、86社が二五一六平方mの展示面積を使った。それに比べると日本の展示コーナーは控え目で、六三六平方mに41社が製品を展示した。

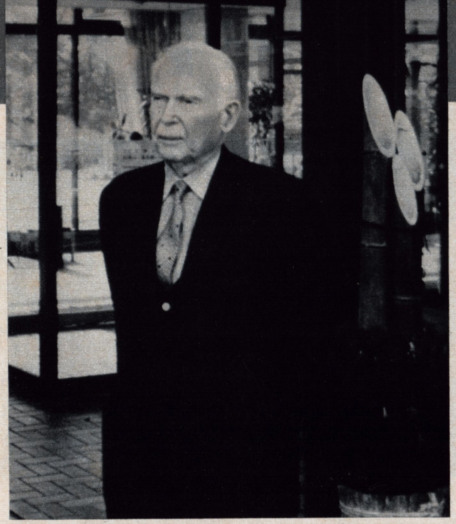
キャノンのコピー機械、松下電器産業のビデオ機器、日立製作所の電子顕微鏡が展示されているコーナーを担当した丸紅社員の南潤一郎さんは、本誌記者の質問に答えて次のように語った。

「海の向こうからの圧力が、明らかにわれわれのビジネスを妨げている。経済制裁はわが社にも影響を及ぼし、われわれはソ連に建設機械と各種電子装置を納入するチャンスを失った。現在でも一部の工業製品は、対ソ輸出が依然禁止されている。私個人としては、ソ連ともっと自由に貿易をしなければならないと思っている。

わが社はソ連で行われるさまざまな工業見本市に参加しているが、〝エレクトロンマシ〟展は初めてだ。わが社が出品したビデオ機器はソ連の専門家の大きな関心を呼んだ。われわれはソ連の関係機関との商談が首尾よく進み、いくつかの商品の輸出契約の調印にまで進むことを望んでいる」

"ソ中接近の基盤はある"

――M・スラドコフスキー極東研究所長に聞く



昨年末の約3週間、ソ連科学アカデミー極東研究所所長のM・I・スラドコフスキー教授（写真）が日本に滞在した。76歳になる東洋学者スラドコフスキーの名はソ連内外でよく知られている。一九二八年、M・スラドコフスキーはウラジオストクの極東大学東洋学部を卒業し、以来もう半世紀以上も極東地域に関連した学術・実践活動を行っている。M・スラドコフスキーは長年ソ連貿易省の機関で働いた（中国駐在通商代表、貿易省局長、同省参与を務めた）。一九五二年に博士候補号、一九五八年には博士号をとった。一九六六年、M・スラドコフスキーは新設の極東研究所長となり、その後ずっと所長を務めている。一九三五年には最初のモノグラフ『漢方の特産品』が世に出た。それ以来多くの学術論文・著作を書いている。最近書かれた著作のうちで特筆すべきものは、『中国と日本』、『露中関係史』（一九六八年）と『ソ中関係史（一九一七―一九七四年）』（一九七五年）、『中国と英国』（一九八〇年）である。このうちの若干の著作は日本でも出版された。M・スラドコフスキーは、ロシア語、英語、スペイン語、日本語で刊行されている季刊誌『極東の諸問題』の編集長である。

帰国を前にしたM・スラドコフスキー教授に本誌M・エフィーモフ記者がインタビューした。

――周知のように極東研究所はソ連の主導的学術センターの一つである。この研究所の機構と研究所が研究している問題についてお話しいただきたい。

わが研究所は一九六六年末、中国、および極東地域の他の国々の研究を行っていた一連の研究所の部を母体に創設された。このような専門の学術センターを創設しなければならなくなったのは、現代世界において極東の諸問題がソ連だけでなく、多くの国々の政策の中で重要な位置を占めているためである。極東研究所には二〇〇人の研究スタッフがいる。最近、モスクワのクラシコフ通り27番の新館に移転した。ついでに言っておくと、全ソ中国・東洋学研究図書館がこの建物の二つの階を占めている。わが研究所では中華人民共和国や日本その他をはじめとする極東諸国の総合的問題やまた極東地域の全般的諸問題を研究している。われわれはまず第一に現代に関心があるのだが、現在起こっているあれこれの過程を理解するには、歴史の知識が不可欠だ。古代史の知識さえも必要だし、伝統や過去の政治的状況を研究する必要がある。極東研究所には次の部がある――史学部（古代史と現代史の2課から成る）、文化部（文化課と思想課）、経済部（工業、農業、一般問題（社会統計学も含む）の3課）、国内政策部（国家機構課、社会団体課、現行政策課）、日本部（経済課、内政課、対外政策課）、それに情報部があり、翻訳課はここに入る。

――リーダー格の学者ではどんな人が極東研究所にいるのか？

次の人を特に挙げておきたい。まず第一に、副所長で、有名な中国問題の専門家のV・A・クリフツォフ教授、日本で良く知られているD・V・ペトロフ教授、V・I・グルニン博士（中

国史）、E・A・コノワロフ（中国経済）、L・A・グドシニコフ、V・F・ソロキン、その他だ。次のような事実も極東研究所の権威を物語っていると言えよう。私が議長を務め、ソ連の多くの著名な学者が名を連ねている当研究所の学術評議会は、極東問題に関するすべての学位論文を審査している。この事実は、当研究所に対する信頼と学問的レベルの高さを物語るものだ。

――ソ連では中国問題専門家要員をどこで養成しているのか？

まず、モスクワのモスクワ大学付属アジア・アフリカ諸国学院、国際関係大学、ウラジオストクの極東大学およびレニングラード大学の東洋学部、それにカザフスタン、ウズベキスタン、キエフ、チタ、リボフの一連の大学で養成している。大学以外にも大学院があるが、一番大きなのは極東研究所の大学院だ。極東研究所の大学院では国内各都市からの大学院生、それに外国からの大学院生も学んでいる。つけ加えれば、極東研究所ではフランスなど他国の学者も研修生活を送っている。

――学位を持つ東洋学の専門家、特に中国専門家はどんな知識を合わせもっているのか？

中国語と英語を自由に駆使し、中国の歴史・文化・経済を知っていなければならない。大学院になると、中華人民共和国のもっとアクチュアルな問題別の専門家になっていく。

――ソ連国内の学術センター間の調整、とくに中国問題についての調整はどう行われているか？

ソ連科学アカデミー幹部会に付属して東洋諸外国研究の学術評議会があり、極東研究所の所長がリーダーを務めている。この評議会には関連の諸問題を研究しているすべての研究所の代表者が入っており、学位論文のテーマも含めて適当な勧告をしている。

このほか、わが研究所は他の学術センターと共同で、一般的な研究論文を発表している。たとえば東洋学研究所や国際関係研究所の学者と一緒に大著『現代史』を作ったし、東洋学研究所と共同で故I・M・オシャーニン教授監修の中露大辞典の刊行に参加した。

――いま日本でとくに大きく注目されている問題について、あなたのご意見を伺いたい。いやこの問題が注目されているのは、日本だけとは限らない。その問題とはソ中関係の将来であるが、あなたのお考えは？

ソ中両国の関係史は、一九一七年までの露中関係史をも含めて非常に古い。その歴史を忘れてはならない。露中関係の特徴は、誰でも知っているとおり、露中関係の領土的接近の過程で互恵の貿易が生まれたことだった。互恵の貿易は一六八九年のネルチンスク条約、一七二八年のキャフタ条約、一八五一年のイリ条約といった平等の条約によって成文化された。かつてカール・マルクスは19世紀中ごろの露中関係の特別な性格を強調した。阿片戦争のあと不平等条約を中国に押し付けた英国を初めとする西側諸国と違い、露中貿易は平等を原則としていた。その結果、マルクスが強調したとおり、中国はロシアに対して西側諸国とは全く異なる態度をとり、ロシアを他の諸国との関係の仲介者とするにいたった（一八六〇年）。

10月社会主義大革命後対中国関係の基盤に置かれたのは、被抑圧諸民族を敬い、経済・政治・精神的援助を与えるレーニンの政策であった。だから中国革命の時期を通じてソ連はつねに中国の革命を支援してきた。これも、一九四〇年末の中ソ友好関係のかなり強固な土台づくりに役立った。中国の指導者自身も認めたとおり、一九四九年の革命の勝利と革命の勝利による中華人民共和国の成立に大きな役割を果したのは、ソ連の援助であった。中華人民共和国の成立とともに、ソ中関係は友好条約の形をとった。

かなりよく知られている時期については、詳しく触れないでおこう。当時のソ連の対中経済・政治・軍事・文化援助の意義をもう一度強調しておくが、一九五六年9月の中国共産党八全大会では、ソ連の援助が中国の社会主義経済の初期の土台づくりに役立ったと述べられた。大会ではこんごの発展の大きな見通しが示され、その見通しは中国を先進的工業・農業国にするための中国共産党の総路線に反映された。計画全体は18年を見込んでいた。

残念ながら一九六〇年からソ中関係は悪化の方向をとった。最近の中国共産党一二全会で党指導部自身、一九六〇年から一九七六年までの期間は、中国を破局的な危機に追いやった「失われた20年」であったと述べた。国内政策は対外政策に反映した。当時の中国の指導部はソ連や他の社会主義諸国と友好関係を結ぼうとはせず、経済・科学技術関係を悪くする（実質的には断絶する）方針をとった。

最近になって新指導部は、この苦しい社会・経済的危機から脱け出そうとけんめいであるが、「失われた20年」の時期について非常に批判的な結論を出して、毛沢東の誤りを認めたものの、一二全会では対外政策面の誤りについては触れなかった。このテーマがやがて取り上げられることを期待したい。

ソ連は関係の正常化やソ中間の障害の除去をめざす提案をたえず出してい

る。一九八二年暮れのY・V・アンドロポフ・ソ連共産党中央委員会書記長の演説の中でも、そのような提案が出された。中国の指導者たちもソ連あてのメッセージの中で復交の用意があることを表明している。

私は客観的条件は確かに好ましいと思っている。たとえば一連の経済的要因がある。貿易にとってメリットや利点の多い七〇〇〇kmのソ中国境は、その要因のほんの一つといえよう。ソ中貿易の特徴は広範な品目の商品を取引できたことであった。たとえば中国の対西側貿易では輸出にかなりの限定があり、石炭や鉱石などを買い付ける国は限られている。

ソ中関係の正常化にとって、一九五〇年代の経験もある程度のプラス要因である。当時、今も中国で操業している主要工場（航空機、自動車、トラクターなど）が建設され、ソ連の先進的な機械製作技術が導入された。これらは経済関係の発展をある程度スムーズにした。中国の指導部が発表した社会主義建設計画は、ソ連の人々から非常に好意的に迎えられたが、これが実現されるかどうかが、問題のすべてであった。社会主義的発展の歩みそのものは、ソ中両国をいやでも近付けるはずであった。

——日本の印象について？

私を招待して下さったのは松本重治・国際文化会館理事長である。松本氏とは以前から緊密に接触しており、氏がわが研究所の招きを受けたこともある。氏は私のために日本の学者たちとの非常に興味深い心に残る会合を準備して下さった。その会合のうちでまず挙げておきたいのは、白鳥、竹内（京大）、矢吹（横浜大）の諸教授との会合で、どれもとても興味深かった。どの方も真の友人だと思った。

——現在の国際問題に関するあなたの見解と日本の学者の意見は一致していたか？

われわれはソ中、日中関係のさまざまな面を論議した。私と話し合った方々は、現在の事態の本質を十分につかんでおり、種々の困難やそれらを克服する方法をよく見ておられた。

——あなたの訪日はこんどが初めてではないが、何か前と変わったことがあったか？

一九六四年の初来日以来、こんどで5回目。日本の変化は目ざましい。新しい高速道路、とくに東京と成田を結ぶ道路はすばらしかった。横浜で日本人観光客を乗せたバイカル号の出航を見た。乗客の大半は若い人たちだった。それは善隣のひじょうによい徴候と言うべきものであった。

日ソ共同出版の〈ソビエトの子どもの本〉第2弾！

昨年の春から始まったモスクワのプログレス出版所と東京の新読書社の共同出版による〈ソビエトの子どもの本〉シリーズに新しく次の2冊が加わった。

☆**『きえた女の子』**（ガリーナ・デムイキナ作、中込光子訳、B5変型版一五一ページ、九八〇円）

有名な画家をおじさんにもつ少女ゾーヤは絵が大好き。友だちと遊んでいるうちに、おじさんが描いた絵の世界にはいりこんでしまった。ゾーヤはそこで、色とりどりの帽子をかぶったプルルンたちと出会い、ふしぎな数日間をすごす。光と音のふしぎな世界に住む草や花、動物たち、迷いこんだ少女の冒険を、みずみずしいタッチで描いたファンタジー童話。

☆**『つぼのおうち— ロシアの動物民話集』**（ラチョフ画、松谷さやか訳、B5変型判78ページ、一〇〇〇円）

動物にちなんだロシアの代表的な昔話集。動物たちに人間の服を着せ、動物たちの性格を巧みに表わしたラチョフの絵が楽しい。日本でもおなじみの「おおきなかぶ」をはじめ10編が収められている。





〈ソビエトの子どもの本〉シリーズがお近くの書店にない場合は、新読書社（〒113、東京都文京区本郷6—8—10、電話03—814—6791）へお申し込み下さい。

第２回日ソ医療北海道シンポジウム

——「消化器ガンの診断と治療」を基本テーマに

日ソ協会北海道連合会理事長 秋月 正夫

ソ連と日本、中でも北海道の医療関係者との相互交流を深めようという趣旨で、日ソ協会北海道連合会主催による第一回日ソ医療北海道シンポジウムが、国際児童年にちなんで一九七九年に札幌市で開かれました。この成果と教訓に学んで、このたび第二回日ソ医療北海道シンポジウムが、「消化器ガンの診断と治療」を基本テーマとして、一九八二年十二月二十一日、札幌市北方圏センター国際会議場で開催されました。



漆崎一郎・札幌医科大学副学長と語るワジム・ゲラシメンコ・ソ連医学アカデミー腫瘍学センター副所長

ソ連からの出席者は、ソ連医学アカデミー腫瘍学センター副所長、腫瘍学研究所所長のワジム・ゲラシメンコ氏で、日本側からは、札幌医科大学副学長・同附属病院長・第四内科教授である漆崎一郎氏ほか二十名が出席しました。

シンポジウムは、私の開会の挨拶のあと、漆崎教授の司会により進められ、日本側の報告が次々と行われました。

日本側の報告は左記の通りです。

一、「胃集団検診と手術成績」（田村浩一・北海道対ガン協会検診センター所長、前田晃・札幌厚生病院副院長・外科医長）

二、「ガンの診断と治療における放射線の役割」（入江五朗・北海道大学医学部放射線科教授）

三、「小児ガンの特異性」（内野純一・北海道大学医学部第一外科講師）

四、「消化器ガンの化学療法」（漆崎一郎氏。時間の関係で文書報告）

以上五名の報告者は、スライドを使用して研究の成果を発表されました。

最後にゲラシメンコ氏が、「ソ連におけるガンの疫学と治療」と題して報告（スライドを併用）しました。ゲラシメンコ氏はこの報告の中で、要旨次のように述べました。

「ソ連では他の先進国と同様、ガンが死因の第二位を占め、全死因の一四・一%である。

五十歳以上のガンの発病者では男性の優位が続いている。第一の原因は肺ガンであり、喉頭ガン、胃ガン、直腸ガンが続いている。女性は一九七五年からガンの罹病率が減っているのに、男性ではふえ続けている。

死亡率では、男性と女性の間に著しい差があり、特徴的なのは、男性の死亡率は一九七三年からさらに激しくふえ続け、女性では一九六五年から減り始めていることである。

ソ連における一位—三位までのガンは胃、肺、皮膚の順位である。

カザフスタンと中央アジアの諸共和国では、食道ガンの罹病率がソ連の平均より高い。これは非常に熱い食物、とくに熱いお茶を伝統的に常用することにもとづいている。

胃ガンの分布は食道ガンと同じように異なっている。しかし一年中多くの果実、野菜をとり、軽い自家製ワインを飲んでいる南の共和国では明らかに少ない。

胃ガンはロシア共和国、特に北の地方で多い。

近年の腫瘍学問題に対する分析は、早期診断と臨床的診断の研究に力を入れる必要性を示した。これは、現在ある腫瘍診断のためのあらゆる手段を利用して治療しうる段階のガンを発見することである。

ガン免疫分野では、抗ガン免疫におけるリンパ組織の役割に関する新しい研究分野が、現在急速に発展している。動物と人の新生物の免疫的予防、免疫的療法、免疫治療について現代の腫瘍学に問題を提起することはきわめて有効である。その解決は特異的・非特異的免疫強化の可能性をあたえ、ガンの診断、治療、予防成果を改善するだろう」

ゲラシメンコ氏は終わりに、人間の健康のために腫瘍の研究がさらに発展することを信じている、と結びました。

ソ連では胃ガンは、ロシア共和国、特に北の寒い地方に多いとされています。北海道でも胃ガンが第一位を占めています。胃ガンは日ソ双方の地域的な共通の問題として提起されました。

日ソの専門家が人類の悲願であるガンの克服に、ガンの診断と治療に、そしてその根本的解決の糸口を見出すために日進月歩のそれぞれの研究成果を発表し交流を深めたことは有意義であり、大きな成果でありました。

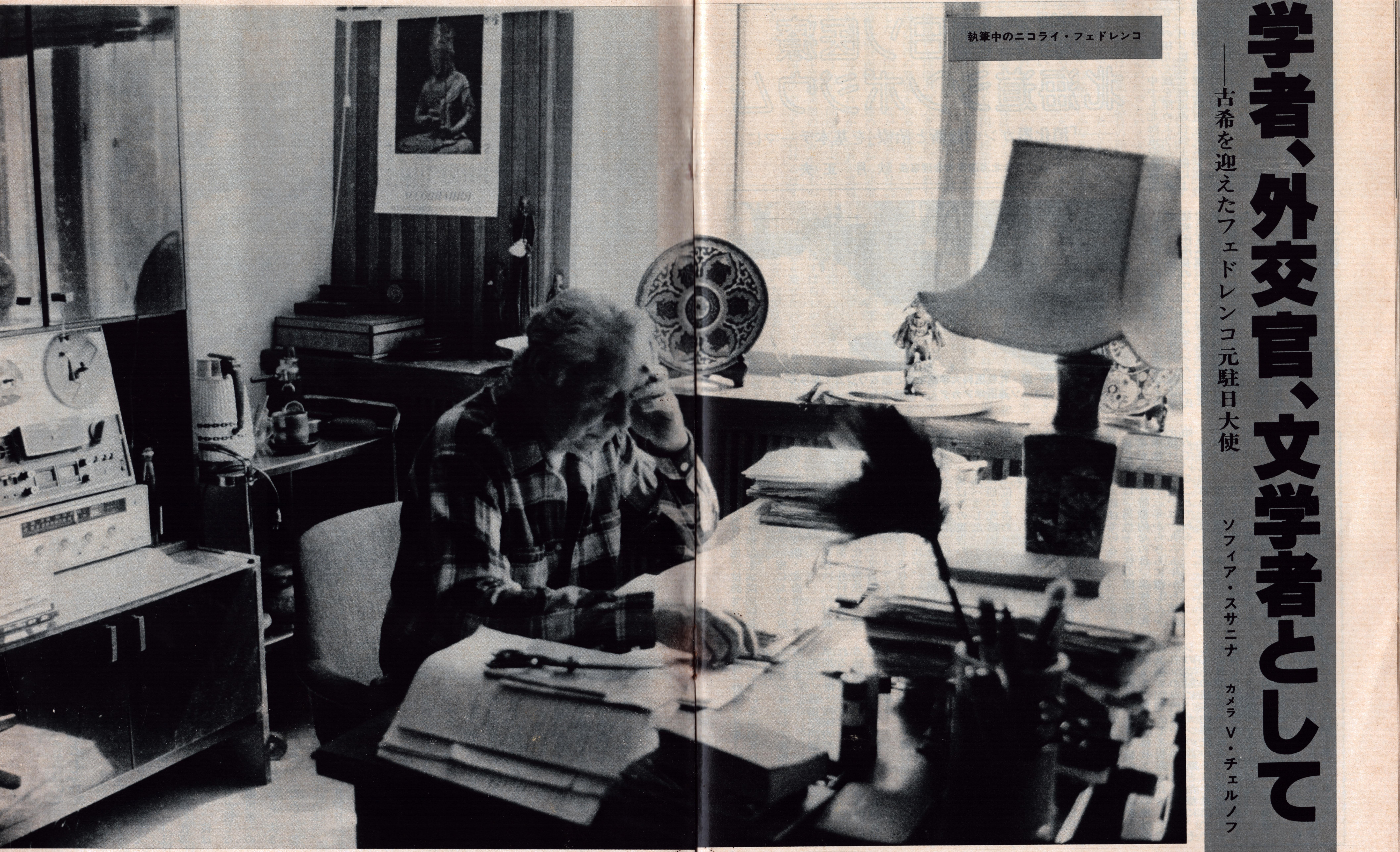
医学分野での日ソ交流は、北海道ではまだきわめて少ない分野ですが、このたびのシンポジウムを通じて日ソ専門家間の相互理解と友好を深め、国際親善に大きな役割を果たしました。

学者、外交官、文学者として

——古希を迎えたフェドレンコ元駐日大使

ソフィア・スサニナ

カメラ V・チェルノフ



執筆中のニコライ・フェドレンコ



碩学の東洋学者、身分の高い外交官、有名な文学者……

ニコライ・フェドレンコはこの三つの異なる仕事を立派に調和させて来た。というよりもむしろ、学者フェドレンコの博識と正確な思考が、日常的に外交官フェドレンコを助けて来たのであり、数十年にわたる外交官としての活動によって培われた権能と広い政治的視野がなければ、われわれが知っている文学者・社会評論家フェドレンコはいなかっただろう。

一九八二年11月、ニコライ・フェドレンコは70歳の誕生日を迎えた。彼はいまなお元気で仕事をつづけている。筆の力は衰えることを知らず、思考はますます旺盛である。

上　雑誌「外国文学」の編集会議

左　長女とその息子に囲まれて

学者として

人生の50年以上をフェドレンコは中国と日本の思想や文学の研究に捧げて来た。もし若いころ、これが生涯の仕事になると予言されたら、彼はそんな予言をほとんど信じないで、将来は隣の銀河系への探険旅行に参加すると、大まじめに答えたことだろう。彼の人生をふり返ってみよう。

彼は一九一二年10月27日（旧暦）、北カフカズのあまり大きくない都市ピャチゴルスクで、大工の家庭に生まれた。普通学校を卒業したあと、トラクター修理工場で仕上げ工として働き、その後、航空中等専門学校に入った。卒業すると、能力を認められた彼はモスクワへ派遣され、のちに一連の優秀な飛行機を生み出して有名になったツポレフの設計事務所で働いた。ここで人生の転機が訪れる。彼はコムソモール委員会から、東洋学研究所に入るよう勧められたのである。当時わが国では、人文科学系の専門家を労働者・農民の出身者で補充することに特別の関心が払われていた。

フェドレンコは同意したが、ためらいがなかったわけではない。だが、試験には見事に合格した。それればかりか、早いうちから中国語に上達して、周囲を驚かせた。彼は中国からやって来たのではないかとさえ言われた。27歳で文学博士候補論文を作成。現代中国文学の創始者——魯迅を論じた。31歳で博士号を取得。中国戦国時代の詩人——屈原（紀元前三四三—二七七）を扱った『屈原の生涯と作品の研究』が学位論文になった。

ニコライ・フェドレンコはソ連科学アカデミー準会員であり、イタリアのフィレンツェ芸術アカデミーの名誉会員でもある。一九七二年には米国のイリノイ大学で、世界の最も優れた中国研究者たちの中から客員教授に選ばれた。



彼は一七〇以上の論文を書き、21冊の本を出している。最初の著書は『現代中国文学概論』で、一九五三年に出版された。最近の著書は一九八一年に出た『中国文学の遺産と現代』と、一九八二年に出た『川端康成。時代の色彩』である。

フェドレンコは古代から現代に至るまでの中国の文学現象の研究、世界文学のプロセスにおける極東の一連の作家の役割の研究、この地域の民族文化の相互とそのロシア古典文化および現代文化との関係の研究によって、わが国の文献学を豊かなものにした。

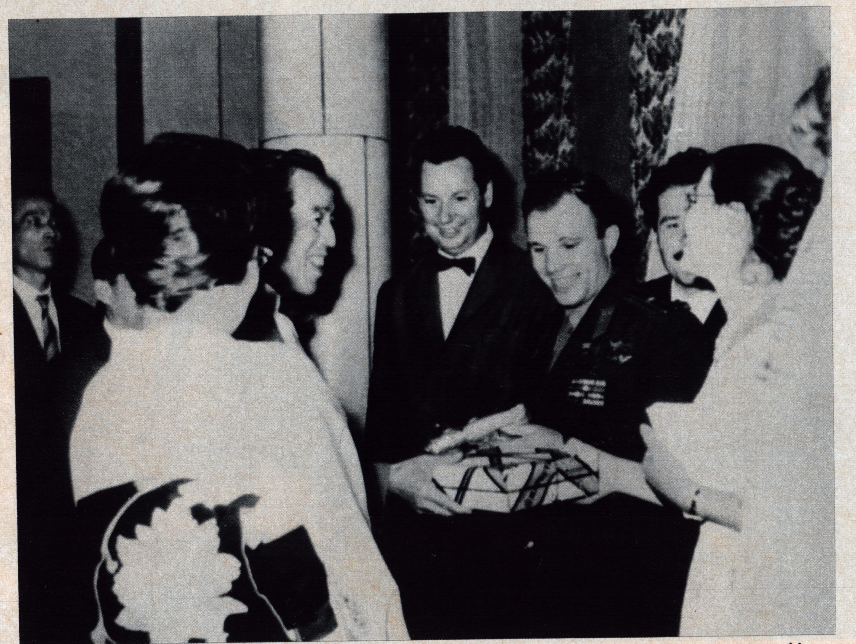
外交官として

学者としての高い評価を得たフェドレンコは、この分野に完全に没頭することもできた。だがふたたび運命の転機が訪れた。一九四〇年、彼は外交官の道に足を踏み入れた。この仕事は合計30年つづいた

が、それがどんなに責任の重い仕事であったかは、いくつかの経歴を見てみれば分かる。
長年にわたる中国での勤務ののち、フェドレンコはソ連外務次官になり、その後一九五八年から一九六二年まで駐日ソ連大使を務め、一九六三年から一九六八年までは国連および安保理事会のソ連代表を務めた。だが外交官としての多忙な仕事にもかかわらず、彼は研究活動をつづけ、著書を刊行しつづけた。このような能力は天与の才ではあったが、ここでは、生活に全力を投入せずにはおかないという人生哲学も重要な役割を果たしている。
外交官としての勤務の年月に、大勢の人々、たくさんの出来事がフェドレンコの目のまえを通りすぎて行った。外交官としての彼の足跡は三つの大陸――アジア、欧州、アメリカに及んでいる。その至るところで彼は、持ちまえのエネルギーと確信を発揮して、平和と、すべての国、すべての民族との友好をめざすわが国の外交方針の実現に努めた。



左 ソ連の国連代表として総会で演説するフェドレンコ（一九六六年）



下 ガガーリン歓迎会で（一九六二年、東京）

『日本ノート』

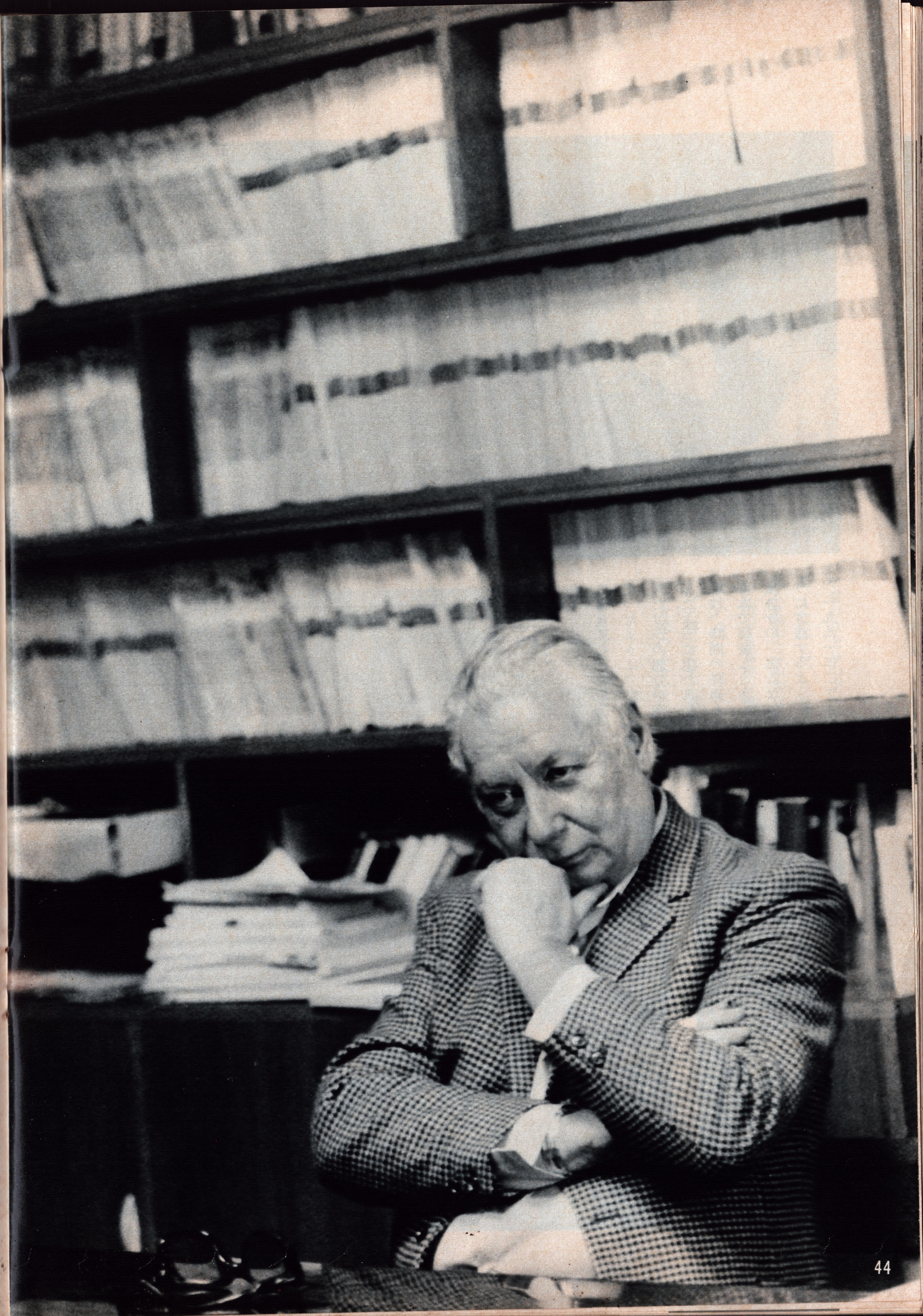
フェドレンコは日本で約4年をすごした。外交活動のかたわら、彼は日本の文化や民族的伝統を研究した。彼は俳優や画家、学者、宗教家など、大勢の文化人と親交があった。日本での興味深い出会い、思想、印象は数年後に一冊の本となって現れた。日本とその国民、文化、歴史、芸術に対する深い尊敬に満ちた本――『日本ノート』（一九六六年）がそれである（日本語訳は『ソ連大使の日本ノート』 飯田規和訳、朝日新聞社刊）。
以下にこの本の一節を紹介しよう。
「電燈の軟らかい光が、つや消しの紙を通して歌麿の画集の最初のページ――『お正月』に落ちる。すると私の目のまえにすばらしい世界――情熱と期待と願望の完全な世界が浮かび上がる。絵師は色と光の核心から日本女性の驚嘆すべき形象を作り出し、それをわれわれ――彼と同様に永遠に生きるもの、すばらしいものへの渇望によって動かされている、まだ見ぬ、遠い子孫に贈ったのだ……民族的独自性によって生み出されたもの、日本芸術の創造物が、普遍的な意義を獲得し、他の諸民族、人類全体の財産になったのである」
「……日本の地と別れるにあたって私は、多くの遍歴者が味わう悲しい気持ちを味わっていた。この国で暮らした歳月と一緒に、この国のどこかに私自身の一部が留まってしまったように、私の心臓のどれだけかの部分が残ってしまったように思われた。のちに私は、時間の経過とともに、日本で経験した多くのものが私自身の一部になったかのように意識するようになった」
一九八一年にフェドレンコ



上 米国の作家アービング・ストーン夫妻と（ソ連作家同盟の執務室で）



右 国連安保理事会の会議のあとで（一九六七年）



フェドレンコは現在、ソ連科学アカデミー準会員、ソ連作家同盟理事会書記、「外国文学」編集長の職にある。

はふたたび日本を訪れたが、こんどは現代世界における作家と文学の位置を話し合う日本の作家の会合に出席するためだった。

「私たちの会合は、あらかじめ日程が決まっている普通の〝円卓会議〟ではなかった」とフェドレンコはこの会合について書いている。「それは創作、世界情勢、作家の生活など、さまざまな問題についての自由な意見交換だった…相互認識と協力のよりよい道を探求する必要があること、諸国民はよき隣人として平和のうちに暮らし、相互理解に努めなければならないことが話された。とはいえ、ほかの道があるのだろうか？　だれも自分が、出された意見や見解に同意する、あるいは同意しない義務があるとは考えていなかった。各人が他人の原理や信念を尊敬し、会合参加者をもっとよく理解しようと努めていた。だから会合の雰囲気は、一貫して誠意ある、礼儀正しいものだった。なぜなら節度は、心の理性だからである……」

文学者として

一九五五年にはニコライ・フェドレンコの著書『中国ノート』が出版された。一九七二年には『外交官ノート』が出版された。『ソゾポルの色彩』と地中海の旅行を書いた『海のノート』が出版されたのもそれほど昔のことではない。一九八二年には『ブルガリア・ノート』が出版された。

これらの本のジャンルを規定するのはむずかしい。著者がそれを〝ノート〟と名づけたのも偶然ではない。それはいかなる枠にも閉じ込められていない、自由な語り、自由な思索である。見聞したことの水々しいディテールが、歴史や叙情的な哲学的挿入部分、社会評論や論争とからみ合っている。

著者の視野は非常に広い。風景、人物、慣習、建築、人々の暮らし、名画、彫刻、演劇、詩……状況や雰囲気が生き生きとよみがえり、たちまち話に引き込まれてしまう。読者は、大原教授宅での新年の夕べで一緒に香り高いお茶を飲み、海女と一緒に真珠を採りに海の底に潜る。夏の日の夕暮れ、昔の中国の詩人——杜甫の家に行って、洞窟の中に入って、湿った岩の匂いを嗅ぎ、その永遠の冷たさを感じる。40階建ての国連ビルの屋上にのぼって、マンハッタン島やイースト・リバーの岸辺のパノラマ、道路を疾走するカラフルな車の流れに視線を投げる。ブルガリアの黒海沿岸のソゾポルで、長く歩いたのち、乾いた木の軋り音と太陽のぬくもりと松ヤニの匂いに満ちた古ぼけた家に入って休息する。

著者は惜し気もなく読者に、地上で見たもの、旅のあいだに集めたものをすべて分け与える。彼の話は、遠い国の人々、どこかロシアのものとは似ていない、だがどこかロシアのものと非常に近い別の文化、別の芸術と私たちとを結ぶ橋のようなものである。

……フェドレンコが外交官の職を退いて、文学の仕事に専念するようになってから10年以上たった。彼はソ連作家同盟理事会書記であり、雑誌「外国文学」の編集長でもある。この月刊誌はかなり厚く（約二七〇ページ）、このような定期刊行物は外国には例がない。これによってソ連の読者は、外国の作家たちの新しい作品をロシア語で読むことができる。ついでに言えば、30年まえ、この雑誌の創刊号にフェドレンコは魯迅の短編を二つ、中国語からロシア語に訳して載せた。

以前と同様に、ニコライ・フェドレンコはしばしば執筆を中断して、ソ連国民の善意の使者として外国へ出かける。平和擁護のためにパグウォッシュ会議へ、米国の作家たちと会談するために〝円卓会議〟へ、日本の各界の代表と意見を交わすために〝ソ日円卓会議〟へ……

フェドレンコは言う——「権威ある作家の声は、真実の声、善意と平和愛好の声であり、人々の理性と心に通じる道を見つけ出す。私たちは作品によって、言葉の力によって、今日何よりもまず人々を心配させ、不安にさせているものについての——人類の上に覆いかぶさっている核戦争の脅威と、それがもたらす恐ろしい結果についての真実を人々に伝えることを、今日の情勢における作家の最高の課題であると考えている」

☆　☆　☆

対ソ親善を望む根室の漁民

本誌記者　ビクトル・シリチェンコ



モスクワの赤の広場を訪れた日ソ友好根室漁業研修会代表団の一行

一九八二年11月25日から12月3日までソ日協会の招きで根室の「日ソ友好根室漁業研修会」代表団（メンバーは飯作鶴幸、山田昭、出崎誠一、泉沢勇の4氏）がサハリンを訪れ、工場や漁業施設を視察し、オホーツク海南部で操業中のソ連の漁民と懇談した。

サハリンのあと一行はモスクワへ飛び、ソ日協会で協会の活動について説明を受け、「漁業研修会」の目的と任務を語り、ソ日協会と友好関係を結ぶことを希望した。

さらに代表団はソ連漁業省で会談し、太平洋の魚資源の共同研究、養魚の技術と経験の交流の問題やソ日漁業関係の他の当面の問題を話し合った。

代表団はモスクワの名所や赤の広場に行き、赤の広場のレーニン廟を訪れ、L・I・ブレジネフの墓に献花した。

飯作鶴幸さん（研修会副会長）は帰国前本誌記者のインタビューに応じ、次のように語った。

「いたるところで温かいもてなしを受け、旅行の成果にとても満足している。うちの研修会が創設されたのは一九八二年3月で、まだ日が浅く、ソ連のこともよく知らない。だからまずソ連に行って、ソ連の人の生活を知るのが先決だと思った。根室に帰ったら、こんどの旅行やソ連の人たちのことを会員に詳しく報告するつもりである。ソ連の人が平和を強く望んでいることはよく分かったし、いまソ連に根室の漁民の真の友人がいることも分かった。

根室には日ソ協会と日ソ親善協会の支部があるが、漁民は仕事の関係上どうしても海に出ている時が多いので、常時これらの団体の活動に参加できない。それでわれわれは漁民だけの研修会をつくったわけだが、だからといってその対ソ親善団体の活動を妨害したり、その活動を無視したりするわけではない。その逆で、われわれは日ソ協会支部の団体会員になっている。

日ソ両国民間の相互理解と協力を発展させる必要がどうしてもある。このことを理解する人の数は増える一方である。うちの研修会が日ソ親善の強化に貢献することを期待している」

ソ連の民族博物館に贈られた日本のキモノ

レニングラードのソ連科学アカデミー人類学・民族学博物館日本コーナーに、このほど日本の出版社「教育社」の高森みどり社長夫人が寄贈したきもののコレクションが補充された。

高森みどりさんは一九八一年にレニングラードの人類学・民族学博物館を観覧したとき、日本のきものを寄贈しようと思い立った。それが実現して、高森さんのプレゼントは、昨年末訪ソした日本対外文化協会（対文協）の代表団（団長　杉森康二事務局長）の手でソ連に届けられ、一九八二年12月3日モスクワで女物きもの9枚、帯止め1本、帯4本の計14点の日本のきもの類が、ユリアン・ブロムレイ・ソ連科学アカデミー民族学研究所長（アカデミー会員）に手渡された。

添え状の中で高森さんは、この贈り物によって、日本の伝統と文化に関するソ連の人々の知識が深まり、今後の両国民間の相互理解と友好が強まることを希望した。

引き渡し式でユリアン・ブロムレイは次のように語った。

「レニングラードの民族博物館を訪れて、陳列品がソ日両国民の文化的接近にいかに大きな役割を果たすかを理解して下さった高森みどりさんに深く感謝している。ソ連の人々は、きものを日本的生活を最も見事に示している象徴の一つと見ているから、この贈り物が選ばれたのはとてもよかった。高森さんの贈り物は、博物館の展示室の一つに陳列されよう。

日本対外文化協会の代表団の皆さんにも感謝申し上げたい。対文協の協力で、ここ数年間にソ日民族学者の交流は、とても実り多いものになった。

われわれの交流は、専門家の交換から始まった。また博物館に興味のある物品や展示会の交換もすでに軌道に乗っている。例えば大阪の国立民族博物館教授で、シベリア、中央アジアの民族学の専門家である加藤九祚氏は、同博物館のために中央アジアのアルバ（荷馬車の一種）を日本に持ち帰った。

われわれの交流の発展に大きな役割を果たしたのは、昨年日本の13都市で開かれた「草原のシルクロード美術展」（本誌82年13号参照）で、この美術展の入場者数は総計約五〇万人にのぼった。この展覧会のために訪日したソ連の学者たちは、俗にいうように、〝自分を示して、他人を見る〟機会をもった。民族学者にとって、人との直接的なふれ合いや、自分たちの研究する物質文化以上に興味深いものは恐らくないだろう……

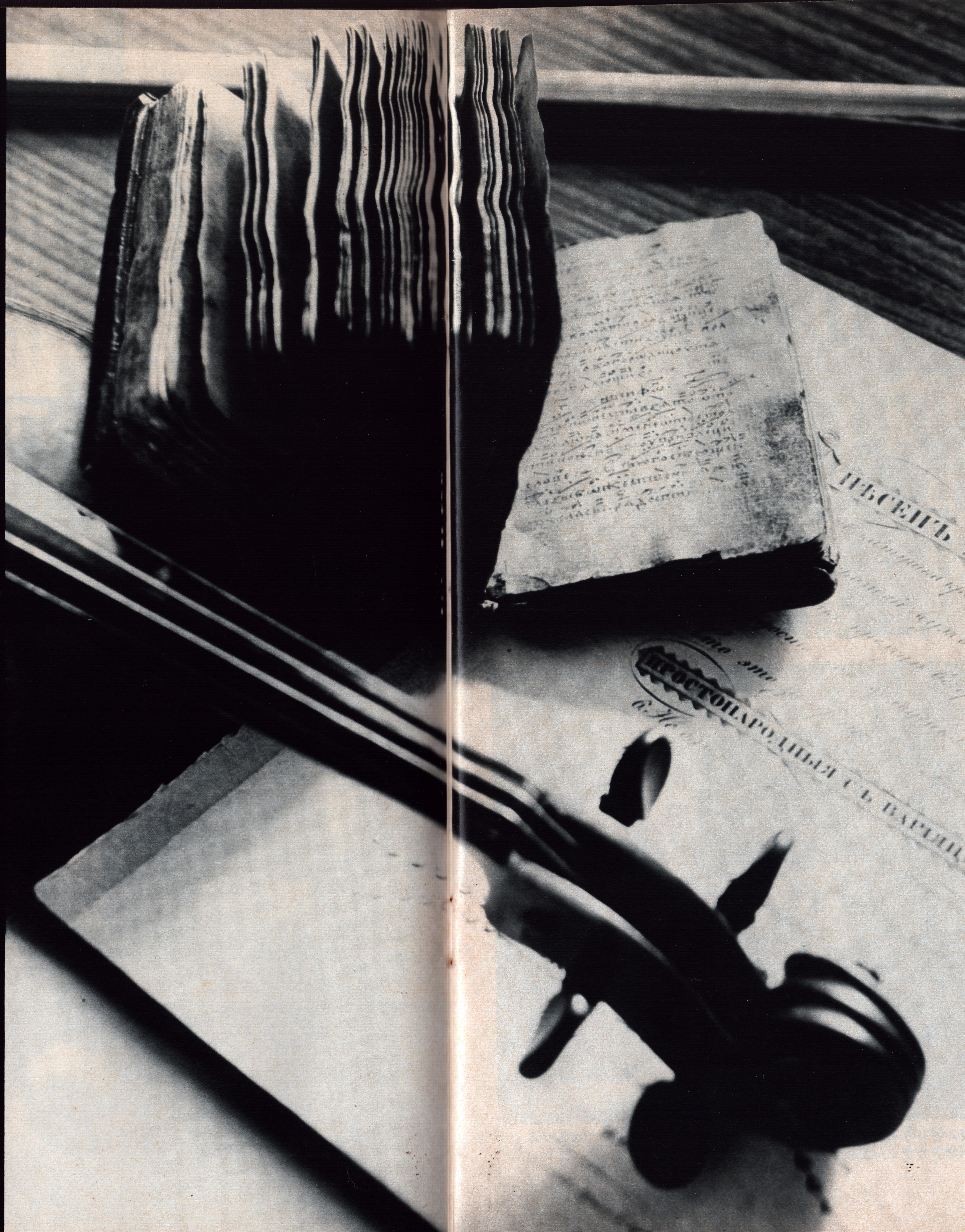
ひじょうに大事なことは、われわれの協力が狭い学問の分野のわくに閉じ込もっていないことである。協力し合うことによって、たくさんの人々が他の民族の生活を知ることができる。また互いによく知り合うことは、諸民族の相互理解と友好の最も重要な条件である。だからこそ、われわれは高森みどりさんのこのすばらしい贈り物に、深く感謝している。日本人の物質文化に興味をもつレニングラードの民族博物館の入場者（通常年間五〇万人を超す）が、この贈り物を正しく評価してくれるものと確信する」



高森みどりさんの代理できもののコレクションをユリアン・ブロムレイ・ソ連科学アカデミー民族学研究所長に手渡す遠藤紀子さん。

よみがえったロシアの古謡

イーゴリ・ゾーチン（文と写真）



国立モスクワ音楽院の図書館に保存されていた中世の楽譜



コンサートホールに変わったかつてのズナメンスキー寺院



▲古いロシアの曲を歌う国立ロシア民謡合唱団の男性ボーカル・カルテット



昔の楽譜を研究するウラジーミル・フィルハーモニー室内アンサンブルのアーチストたち

古いロシアの音楽が、モスクワの最も古い地区の一つ――ザリャジエにあるズナメンスキー寺院（17世紀建立）と聖ワルワラ教会（18世紀末―19世紀初頭建立）のドームの下で響きわたった。これらの教会は修復ののち、コンサートホールになったのである。

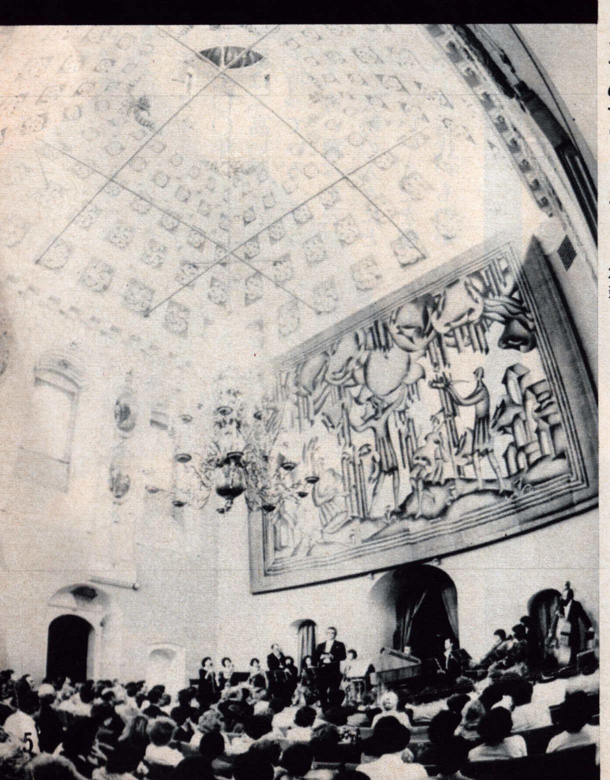
四〇〇年まえに作曲されたメロディーに耳を傾けるのも楽しいではないか。

ウラジーミル市（ソ連欧州部中央）のフィルハーモニー室内アンサンブルの指導者ビクトル・コルナチェフは言う――「大グリンカ（一八〇四―一八五七）の出現まで、ロシアの器楽とオペラ音楽はさしたる芸術的価値を持っていなかった、という意見がありました。これは大変な誤解です。ロシアの音楽芸術は数百年の歴史を持っています。過去のロシアの作曲家たちは、民謡の多様なメロディーを広範に利用して、興味深い器楽曲やオペラを生み出しています。私たちのアンサンブルはグネシン記念モスクワ音楽教育大学とモスクワ音楽院の卒業生が主体になって編成されていますが、聴衆に豊かな音楽文化の土壌を呼びもどしてやろうと思い立ちました」

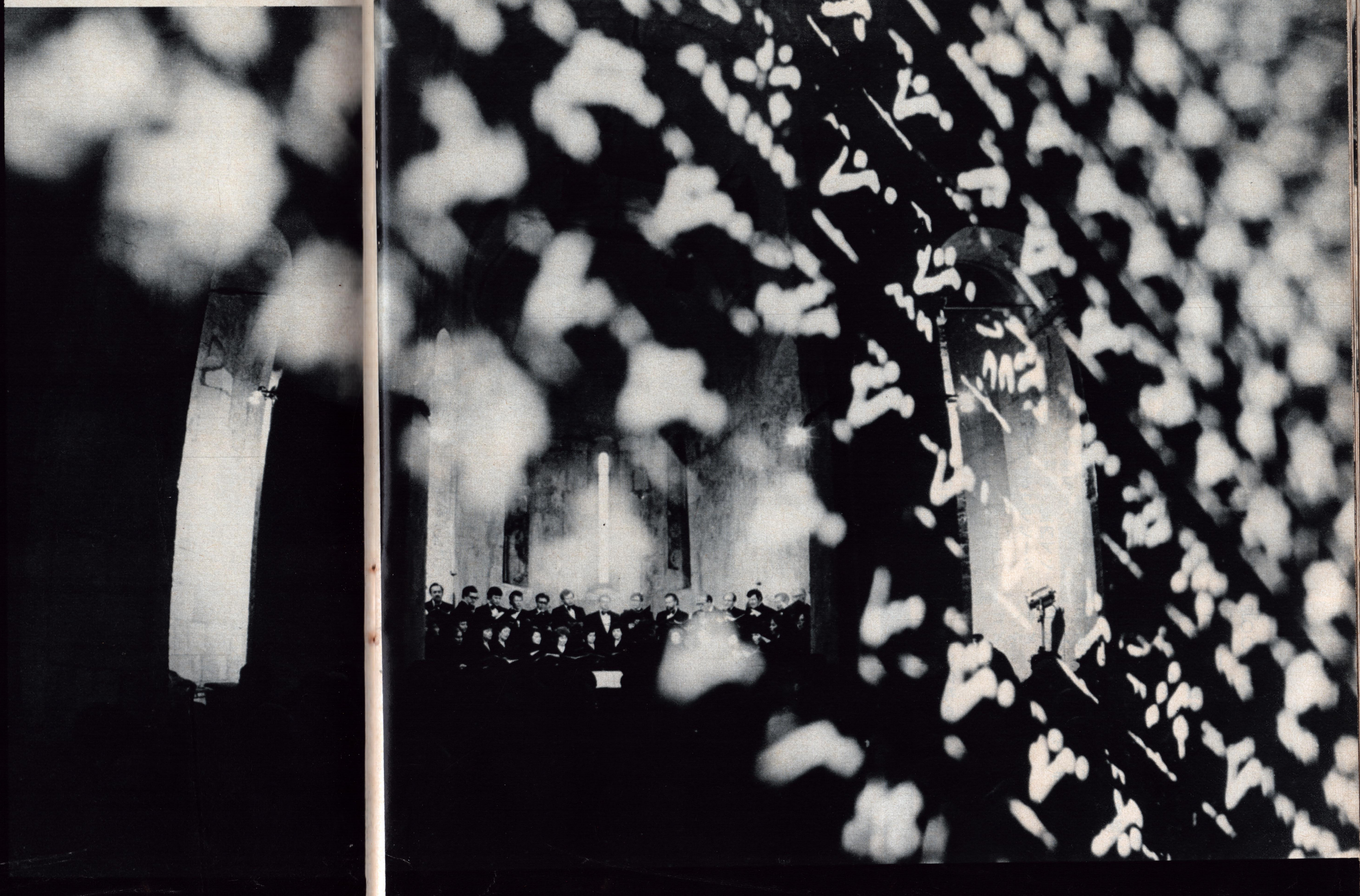
古い作品の総分譜を見つけるには、多くの時間が必要だった。音楽研究家のワレリア・ラジェワやビクトル・コルナチェフ、アンサンブルのソリストたちは、モスクワ音楽院の希こう書部、国立レーニン図書館音楽部、オスタンキノ18―19世紀農奴創作博物館で多くの時間を過ごした。このような努力の結果、民謡のメロディーをもとにした農民ステパン・デグチャリョフの興味深い作品、ワシリー・パシケビチ、エウスチクネイ・フォーミン、オシプ・コズロフスキーの器楽曲やオペラなど、ロシア音楽の独特な百科全書ともいうべき作品が発見された。

学者や研究者によって発掘された無名の作品もアンサンブルのレパートリーに取り入れられた。ソ連では昔の音符である独特の記号が記入された歌集が少なからず収集されている。しかし、16―18世紀のものであるこれらの手稿は何も語ってくれなかった。なぜなら、古いメロディーを表記した昔のナゾめいた音符が解読できなかったからだ。大勢の人々がその秘密に迫ろうと試み





アンドレイ・ルブリョフ記念中世ロシア芸術博物館のスパスキー寺院で
▲ウラジーミル・フィルハーモニー室内アンサンブルのソリスト――オリガ・フドニツカヤ
かつてのズナメンスキー寺院のコンサートホールでは、きょうもロシアの古いメロディーが響く。





た。ロシアの古い音楽の研究に取り組んだ有名な文学者で音楽家でもあるウラジーミル・オドエフスキー（一八〇四―一八六九）は、七〇〇年以上も保存されて来た賛美歌は「高い歴史的意義と芸術的意義」を持っている、と強調し、「18世紀までの古い調べを表記していた無線の楽譜が大勢の人々にとっていまだに解読できない」ことを嘆いた。オドエフスキーは古代のものから17世紀に使われていたものまで、ロシアの音符のサンプルを集めた。

中世ロシア音楽の解読は、現代の技術手段を利用して初めて可能になった。こうしていま、忘れられていた作品がウラジーミル室内アンサンブルのレパートリーに加えられたのである。かつてのナゾの曲は、広範な聴衆の手に届くものとなった。

アルハンゲリスコエ邸宅博物館で公演するウラジーミル・フィルハーモニー室内アンサンブル



ウラジーミル・フィルハーモニー室内アンサンブルのソリスト――アレクサンドル・バラグロフ

チュクチ民話

娘と三日月

「ソビエトには、日本のかぐや姫のお話のような月にまつわる言い伝えや伝説がありますか？」――本誌編集部はこんな質問を大阪の村上奈穂子さん（小学５年生）からいただきました。

ソ連には100以上のさまざまな大小民族が住んでおり、各民族にそれぞれ月にまつわる言い伝え、伝説、迷信があります。多くの場合、月はただ夜空に輝く天体として登場しますが、ときには人間――女あるいは男の姿で現れます。男の場合の月は三日月です。三日月、満月とも善玉もいれば悪玉もいます。

村上奈穂子さんと同じ疑問をお持ちの読者の皆さんへのお答えとして、チュクチ民族に伝わる民話をご紹介しましょう。チュクチ人はソ連東北端のチュコト半島に住む少数民族です。



チュクチ人の中に、一人娘と暮らしている男がいました。娘はとてもよく父親を助け、トナカイの群れを、夏には部落から遠くまで連れて行って番をし、冬にはもっと遠くまで連れて行って番をしました。部落にはほんの時たま、雄トナカイのそりで食料を取りに戻るだけでした。

ある夜のこと、娘の雄トナカイが頭をもたげ、空を見上げてこういいました。

「見てごらん、見てごらん！」

娘が空を見上げると、三日月が２頭立てのトナカイぞりに乗って降りて来るのが見えます。

「どこへ行くのかしら？　なにしに？」

と娘が聞くと、

「あんたをさらいに来るんだ」と雄トナカイは言います。

娘は心配になりました。

「どうしよう？　私をさらって行くだなんて！」

雄トナカイがひづめで雪を蹴散らすと、そこに穴ができました。

「さあ、早くここにしゃがんで！」

娘は座りました。そこに雄トナカイが雪をかけます。娘の姿は隠れ、こんもり一つ、雪の小山があるだけです。

三日月が空から降りてきて、トナカイを止め、そりから降りました。歩き回り、あたりを見回して娘を探します。けれど娘は見つかりません。雪の小山に近づいて帽子のてっぺんを見つけましたが、それが一体何なのか見当もつきません。

「どうも不思議だ」と三日月。「一体どこに隠れたんだ？　見つからないじゃないか。ひとまずひき上げて、また降りてくることにしよう。その時はきっと見つけて、さらってやる！」

三日月はそりに乗り、２匹のトナカイと舞い上がって行きました。

三日月が去ったとたん、雄トナカイは雪をかき散らします。

娘が穴から出てきて言うことには、

「早く部落に行きましょう。そうでないと三日月が見つけて、また降りてくるわ。そしたらもう隠れることもできないわ」

娘はそりに乗り、雄トナカイは全速力でそりを引きます。走りに走って、部落にたどり着き、トナカイの皮を張ったテントにとび込みましたが、お父さんがいません。どうしよう？

雄トナカイがせかします。

「隠れなくては。三日月があとを追ってくるよ！」

「どこに隠れたらいいの？」

「私があんたの姿を変えてあげよう！　石の柱はどうだろう」

「わかってしまうわ！」

「テントの支柱はどうだろう」

「わかってしまうわ！」

「じゃあ、張り皮の毛では？」

「見つかってしまうわよ！」

「どうしたらいいだろう？　じゃあ、ランプに変えよう！」

「それならいいわ！」

「さあ、すわって！」

娘はしゃがみ、トナカイがひずめでトンとたたくと、娘はランプに早変わり。ランプはあかあかと燃え、小屋の中を照らします。

娘がランプになったとたん、三日月はトナカイの群れじゅうを探し回り、それからテントめがけてやってきました。

自分のトナカイをつないで、テントに入ります。娘を探し始めましたが、探しても探しても、見つかりません。支柱と支柱の間を探し、家具という家具、毛皮の毛の一本一本、寝床の下の小枝、テントの中の土くれ一つ一つを調べましたが、娘はどこにもおりません。

三日月がランプに気付かないのは、ランプがあかあかと燃え、三日月もこうこうと輝いているからでしょう。

「不思議なことだ！」と三日月。「娘はどこに行ったんだ？　どうやら、引き上げなければならんようだ」

三日月はテントを出て、トナカイの綱をときました。綱をとき、そりに乗り、走り出したとたんに娘はランプからとび出し、テントから腰までのり出して、笑ってこう言いました。

「私はここよ！　私はここよ！」

三日月はトナカイを乗り捨て、またテントへ。と、娘はまたランプに早変わり。

三日月はまた探します。小枝の間、木の葉の間、毛皮の毛の一本一本の間、土くれの間。娘はどこにもおりません。

「なんという不思議なことだ！　娘はどこだ！　どこに消えた？　手ぶらで帰らなければならんようだ！」

三日月がテントから出て、トナカイの綱をといたとたん、娘はテントから腰までのり出し、笑って言いました。

「私はここよ！　私はここよ！」

三日月はテントへ取って返し、また娘を探し始めました。

長いこと探し、あちこち掘り返しても、娘は見つかりません。

探し疲れた三日月は、げっそりして、ぐったり。歩くのもやっと、手を上げるのもやっとです。

こうなると、娘はもう三日月がこわくありません。元の姿に戻ると、テントからとび出し、三日月をひっくり返して、手足をしばりつけました。

「おお！」と嘆く三日月。「私を殺すのか！　殺すなら殺すがいい。悪いのは私だ。お前をさらっていこうとしたのだから。ただ殺す前にテントの中に私を入れておくれ。凍えてしまったから、温まりたいんだ」

娘はびっくりして聞きました。

「あんたが凍えるですって？　あんたはいつまでも自由気ままに暮らす、宿無しの風来坊。外にいるのが当然よ！　あんたにどんな屋根が要るっていうの！」

三日月は娘に頼み始めました。

「私がずっと宿無しだというのなら、私を外へ放しておくれ！　私はお前たちの民族のなぐさみとなろう。私を放しておくれ、そうすれば夜を昼に変えてあげよう。私を放しておくれ、そうすればお前たちの民族のために、1年を測って細かく分けてあげよう。まず老いた雄牛の月となろう。そのあと子牛が生まれる月となろう。そのあと水の月となろう。そのあと草木の月となろう。そのあと暖かさの月となろう。それから角を切る月、そのあとトナカイの愛の月、最初の冬の月、日が短くなる月……」

「あんたを放しても、あんたが元気になって手足が丈夫になっても、私をさらいに来ないかい？」

「もう、けっして！　お前のことは忘れよう！　だってお前は賢すぎる。もう二度と、空から降りてくるものか」

（さし絵　G・スピリン）

ムスチョーラの細密画

ムスチョーラ村はソ連欧州部の中央、ウラジーミル州クリャジマ川のほとりにある。村がある一帯は、ロシア的なすばらしい風景で名高い。森影の静けさ、河川敷の草地の濃い緑、川に沿って並んでいる農家のくっきりした輪郭――恐らく、こういった美しい風光が村人たちの美術的な才能を培ったのだろう。

ムスチョーラ村の絵師たちのことが初めて史料に顔を出すのは一六二六年。すでに当時からこの地の聖像絵師たちは有名だった。

一九一七年の10月社会主義革命のあと、聖像絵師たちにとっては新時代の芸術の中で占める自分たちの場所の探求が始まった。何百年もかかって磨きあげられてきた聖像画の技法をどうするか、自分たちの芸術を人々に有益なもの、必要なものにするにはどうしたらいいか？

一九三一年、ムスチョーラ村に美術工房「プロレタリア芸術」が組織され、かつての聖像画の名人たちが細密画の技術を十分に発揮できるようになった。彼らは張り子細工にニス塗り細密画を描く技術を身につけ、モスクワ近郊フェドスキノ村の職人たちの協力で張り子細工の製法を学んだ。フェドスキノ村は18世紀にロシアのニス塗り細密画工芸が生まれた場所として知られている。

ムスチョーラの細密画の特徴は、その独特のカラフルな色調であり、例えば有名なパレフ村の細密画などよりも深い、リアルな生活描写である。ムスチョーラの画家たちはまた、パレフ塗りの特徴になっているような黒地を用いない。細かい描画、楽しいコンポジション、ところどころにほの見えるソフトな色彩と繊細な色の配置――こういった要素がムスチョーラの細密画に特別の叙情性と暖かみを与えている。更に金色の飾りわくが絵を引き立たせる。

ムスチョーラの美術家たちが細密画の画題として選ぶのは民話とロシアの風景。様式は統一されていても、個々の美術家の画風は失われていない。だからムスチョーラの細密画作品には、一つとして他の作品に似ているものはない。それぞれの手箱、コンパクト、ブローチ、壁かけなどは、まさにオリジナルな芸術作品なのだ。

ムスチョーラには美術職業技術学校があり、ベテランの画家たちがこのすばらしい芸術を受け継ぐ若い世代に自分の経験を伝えている。

（カメラ　M・アンフィンゲル）

←

V・モロトキン画「競争」









▶ロシアの民話をモチーフにしたL・ズイコフの作品

◀ムスチョーラ村の工房で

◀P・エルショフ作『せむしの小馬』をモチーフにしたV・チホミロフの作品



B・リュボミロフ画『ルサルカ』（A・プーシキン作の劇詩をモチーフにしたもの）



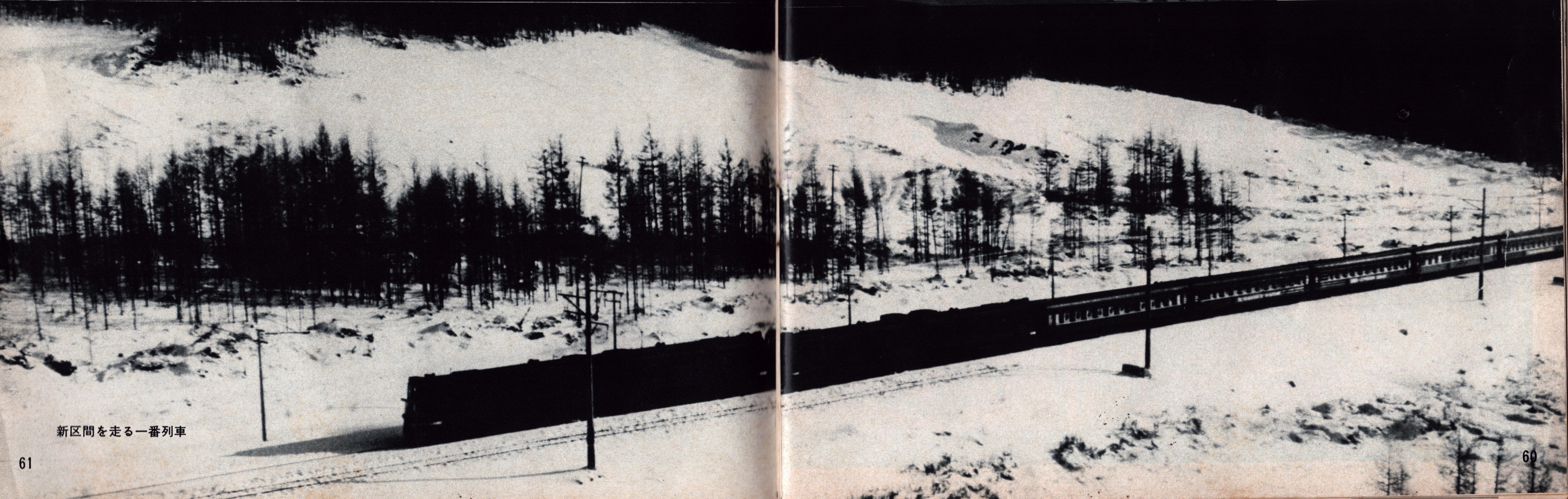
Y・バベノフ画『花嫁選び』

営業を開始したバム鉄道東部区間

本誌極東担当記者　エブゲニー・ブガエンコ
カメラ　Y・ドベルニク



バム鉄道の新しい東部区間——ポスティシェボ駅＝第２ウルガル駅間（316km）が平常運転を開始。ポスティシェボ駅での祝賀集会でテープカットをする関係者（右からレフ・ロタレフ・バム鉄道管理総局長、ビクトル・パステルナーク・ハバロフスク地方執行委員会議長）



新区間を走る一番列車


第2ウルガル駅


スルク駅


ポスティシェボ駅



第２ウルガル駅に到着した一番列車

一九八二年11月3日、ハバロフスクの鉄道駅から急行旅客列車が出発した。コースはハバロフスク＝コムソモリスク・ナ・アムーレ＝ポスティシェボ＝アムグン＝ジャムク＝ゲルビ＝スルク＝ソロニ＝第2ウルガル＝イズベストコバヤ＝ハバロフスク。

列車の乗車券は一般には販売されず、バイカル・アムール（バム）幹線鉄道建設に参加した優秀な労働者と技師に賞として贈られた。これは区間開通記念の一番列車だった。国家委員会がバム鉄道のポスティシェボ駅から第2ウルガル接続駅までの区間（三一六km）の平常運転を許可したのである。この区間には七つの鉄道駅、11の待避駅、七つの町、38kmの構内線が建設された。

第2ウルガル駅は約四〇〇kmの線路で南のモスクワ＝ウラジオストク間シベリア横断鉄道とつながっている。東部区間のうちポスティシェボ＝コムソモリスク・ナ・アムーレ間の二〇一kmはすでに営業している。コムソモリスク・ナ・アムーレからは、建設ずみの長さ約1・5kmの鉄道・自動車橋を通って、既設のコムソモリスク・ナ・アムーレ＝ワニノ＝ソビエツカヤ・ガバニ線とつながっている。つまり、太平洋岸の諸港に出られる。ここから日本、米国、その他の国への海路が開けており、サハリン島へのフェリー航路や、北方のカムチャツカ、マガダンへの海路が始まっている。

「平常運転を許可する」という短い言葉のうらには、タイガ（針葉樹林帯）地域の生活における巨大な変化がある。予定線沿いに町が生まれ、一〇万平方m以上の住宅、学校、幼稚園、文化会館が建設された。

営業を開始したばかりのバム鉄道のこの区間は、木材（主としてカラマツ、アカマツ）、石炭、スズ、銅、タングステン、その他の豊富な資源が集中しているソ連極東の、容易に近付きがたい地方を通っている。これらの資源を基盤にして大規模な林業施設、ソーネチヌイの選鉱コンビナートがすでにつくられており、輸出向け木材を供給する林業コンプレクスが建設中である。

バム鉄道の新しい東部区間の平常運転の開始にあたり、ポスティシェボ駅で集会が開かれた。集会ではアレクセイ・チョールヌイ・ソ連共産党ハバロフスク州委員会第一書記が演説した。

「バム鉄道東部区間の建設は、他の区間もそうだが、わが国諸民族の兄弟的友好の輝かしい模範である。ここではソビエト国民の光栄ある勤労的伝統、つまり共同の力で複雑な国民経済的課題を解決するという伝統が引き継がれている。ここでは真の民族協力の精神、ソ連諸民族の単一家族の感情が強まり、発展している。

わが国の多くの民族の出身者が建設に参加しているバイカル・アムール鉄道は、人の住まない広大な地域の社会・文化的改造の強力な加速器となろう。しばらくすると、ここでも新しい採鉱企業や木材加工企業、機械製造工場、製鉄業、非鉄金属工業、化学工業、木材加工工業の工場の建設が展開されよう。新しいソフホーズ、副業経営、温室コンビナート、肉・牛乳生産企業、農産物の加工・保存企業を組織することによって、農工コンプレクスが発展するだろう」

というわけで、バム鉄道の東部区間を列車は走り出した。だが幹線全体の建設はどのように進んでいるのだろうか？

レフ・ロタレフ・バム鉄道管理総局長は語る。

「バム鉄道の全線直通運行は、計画どおり一九八四年末に始まる予定だ。しかし個々の区間は、線路、駅、その他の施設が完了するにつれて平常運転を開始する。現在、石炭、木材、建設資材を積んだ列車が幾つかの区間――西部のレナからクネルマまで、中部区間のティンダからジプクンまで、ヤクーチアのベルカキトからティンダを通ってシベリア横断鉄道上のバム駅までの支線――を走っている。今回さらにもう一つの区間――ポスティシェボ＝ウルガルが加わったわけだ。一九八二年の1年間だけでも、バム鉄道で約五〇〇万tの石炭、数百万平方mの木材が運ばれた。

バム鉄道の線路敷設の年平均テンポは高い。これからは年間三〇〇kmほどの区間が平常運転に入るだろう」

ソ連船を訪問して

自治労加古川市職員労働組合
（日ソ協会播州支部準備会）　菅野　逸雄



姫路城を背に記念撮影

『今日のソ連邦』を毎号大変楽しく読ませてもらっています。今回は、皆さんに私たちのメンバーの活動をご紹介したいと思います。

昨年の11月13日、港に停泊中のソ連船を訪ねました。ブレジネフ書記長が亡くなられた直後ということもあり少人数での訪船でした。船員の方々と歓談しているうちに船長が帰船され、ミーティングの場所へ案内されました。そこで私たちは乗組員全員に、ブレジネフ書記長逝去の弔問も兼ねて日本の友人たちが来てくれたと紹介されました。私たちが持参した白ユリの花を遺影の前に献花したあと、全員が黙とうを捧げました。

ミーティングの後は船長室で軽食を前に交流を深めました。いつもならアコーディオンの伴奏による歌が出て、船員の方々との歌の交歓が始まるのですが、喪に服する時でもあり、会話での交流となりました。

その翌日、訪船できるとは連絡しておかなかったのですが、私の家族（妻と小一の男子）、長谷川さんの家族（幼稚園の男子）、村上さんの家族（奥さんと男子2人）、それに宮内さんという友人の計10人で再度船を訪れ、船員の方3人を姫路城へ案内しました。遅くなってしまったので天守閣までは登れませんでしたが、城の前でうどんを食べたりビールを飲んだり、楽しい一日を過ごしました（うどんの味については「おいしい」と「まあまあ」の二手に分かれたようです）。

私たち「日ソ友好訪船友の会」、「日ソ協会播州支部準備会」では、このように、毎月一回、入港するソ連貿易船を訪れ、交流と友好を深めあっています。そして、今日吹き荒れる反ソ・反社会主義キャンペーンに対し、実際の交流を深める中で、現実の社会主義社会――ソ連邦の実情を学び、私たちの日本における労働者や勤労者の闘いの糧にしていきたいと思います。

モスコー・ニューズ紙のクイズに日本から2名入賞

モスクワで発行されている週刊紙「モスコー・ニューズ」（ロシア語、英語、フランス語、スペイン語、アラビア語版がある）では、毎年、外国人読者を対象としたクイズ〝あなたはソ連について何をご存知ですか？〟を行っているが、昨年のクイズでは日本から2人の読者が5位と6位に入賞した。5位は東京の杉山春子さんで賞品はサモワール（ロシア風湯わかし器）、6位は同じく東京の大里忠雄さんで賞品はコハク製カフスボタンとネクタイピン。なお、1位の10日間ソ連旅行には、チェコスロバキア、インド、マダガスカル、スペイン、シリアの5名の読者が入賞した。

モスコー・ニューズ紙では、ことしも1位（5名、10日間のソ連旅行招待）のほか、一四〇人分の賞品を用意して、同様のクイズを実施する。詳細については近くモスコー・ニューズ紙上に発表される。

ソ連へ春の親善囲碁旅行団

東京の日通航空では、同社主催、日本棋院が後援する第5回ソ連親善囲碁旅行団を3月26日から4月3日まで9日間の予定で、モスクワ、キエフ、レニングラードに派遣することに決め、参加者（20名）を募集している。旅行団には日本棋院の影山利郎七段が同行。費用は大人三六万八〇〇〇円、子供二八万八〇〇〇円。詳細についてのお問い合わせは、〒105東京都港区新橋1―5―2、電話03・571・8481（代表）の日通航空・国際旅行部団体2課へ。

編集部からのお願い

編集部では、本誌の記事についての読者の皆さんのご感想、ご意見、ご注文、ご提案を歓迎しています。皆さんのご意見を出来る限り誌面に反映させて、本誌の内容をより充実したものにしたいと思います。是非、忌憚のないご意見をお寄せ下さるようお願いします。

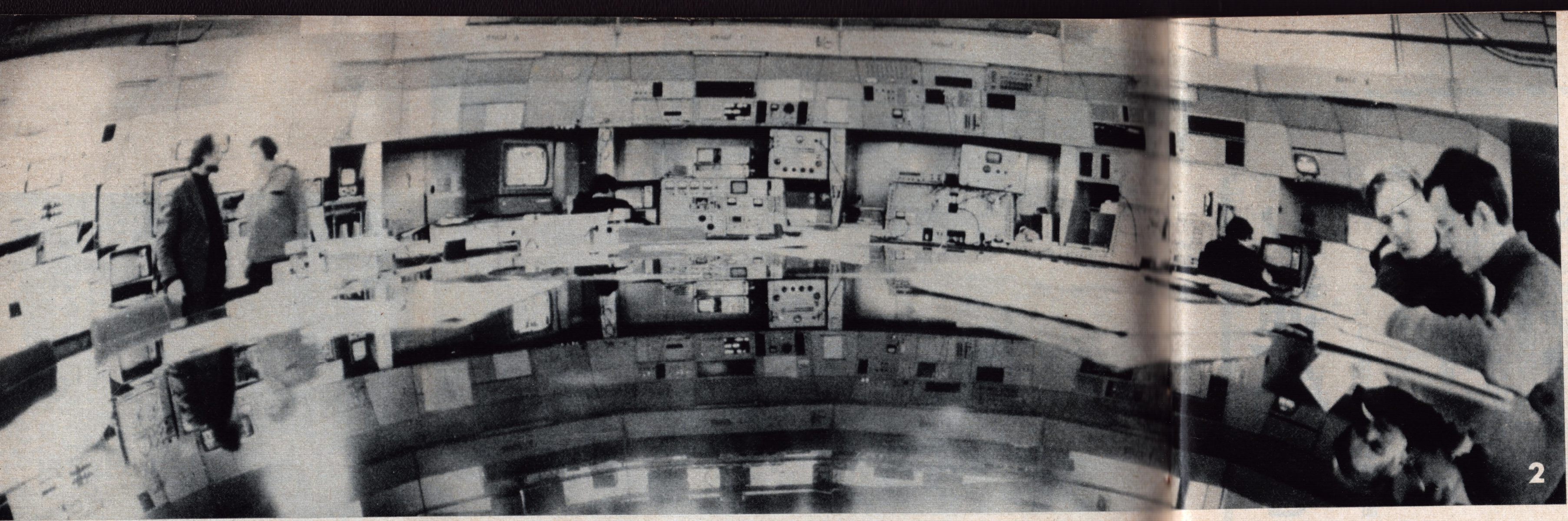
また、身近の日ソ交流関係のニュースやソ連旅行記、その他、読者の皆さんがお書きになった記事や文章、撮影された写真もお待ちしています。興味深いものは、誌上で紹介させていただきます。

あて先は、〒141 東京都品川区東五反田3―9―13、ソ連大使館広報部「今日のソ連邦」編集部です。

無料パンフレットの配布

☆**L・I・ブレジネフ著『回想』**
B6判、58ページ。お申し込みは送料（郵便切手170円）を添えて、ソ連大使館広報部へ。

☆**ユーリー・ジーリン著『破滅か、軍縮か――ソ連はこう考える』**
B6判、216ページ。お申し込みは送料（郵便切手200円）を添えて、〒141東京都品川区東五反田3―9―13、ノーボスチ通信社東京支局へ。





1　ソ連科学アカデミー・シベリア部経済・工業生産組織研究所長のアベル・アガンベギャン・アカデミー会員。
2　ソ連科学アカデミー・シベリア部核物理学研究所。コライディングビーム加速器ＶＥＰＰ―4の制御盤。
3　ソ連科学アカデミー・シベリア部の幹部会の会議

科学技術

ロシアの科学研究

ノーボスチ通信科学評論員　レオニード・スタロセリスキー



できるだけ多く自分の知識、経験を伝えたいという熱望、心から関心を示す人のすべてに自分の成果を分かち与えたいという絶えざる希望——これはすべての時代にわたってロシアの科学と科学者たちの特徴である。一九二二年のソビエト社会主義共和国連邦の結成後、ロシアの学者たちは、学術センターがようやく生まれつつあった他の共和国の学者たちを援助した。一九一九年（この年にソビエト・ウクライナの科学アカデミーが創設された）から一九六一年末までに14の連邦構成共和国に共和国科学アカデミーが設立され、ロシアの学者たちはこれらのすべてに、基礎的科学研究を組織するうえで大きな援助を与えた。ロシア連邦共和国の学術センターになったのは、全国の基礎科学と応用科学全体の学術的指導を行っているソ連科学アカデミーである。

学術センターの星座

科学アカデミーが下部機関をもっていないようなロシアの地方または州を挙げるのはむずかしい。ソ連科学アカデミーには16の部門別の部のほかに、シベリア部、極東およびウラル学術センター、ロシア連邦共和国のさまざまな地理的地域にある九つの支部がある。各支部は、その地域の自然の特殊性を反映した独自の科学的な顔をもっている。たとえば、有用鉱物に富むコラ半島の学者たちの関心の的は地質学の諸問題であり、ダゲスタン（カフカズ）ではまず第一に地熱発電と地熱供給の可能性が研究されている。

ソ連のどこかの地理的地域で、学者たちがその解決に参加していないような問題は存在しない。強力な重工業、まず第一に鉄鋼業が集中している地方——ウラルを例にとってみよう。今日、ウラルでは鉄鉱石の埋蔵量が目立って枯渇しつつある。こうして、ウラル問題が出現した——強力な工業基地はどうあるべきか？　スベルドロフスク、マグニトゴルスク、チェリャビンスクの諸企業をどのようにして完全操業させるか？　ウラルの冶金工業、機械工業の経験豊富な要員たちをどのようにして合理的に利用するか？

ソ連科学アカデミー・ウラル学術センターの学者たちが問題の解決を援助した。ここでは冶金工程の科学的原理の研究、選鉱の研究に重点が置かれている。ウラルの地質学者は北ウラルと北極圏ウラルで豊富な新鉱床を発見し、経済学者はこれらの鉱床の最適開発方法を基礎づけ、冶金学者は貴重な成分が一つも無駄にされないように、鉱石の加工とその総合的利用の新しい進歩的な技術を開発した。ウラルの諸企業は現代化が積極的に進められ、最新鋭の工程に切り替えられている。古いウラルの重工業は新しい人生を歩み始めている、と言っていいだろう。

シベリアの科学界

まだ30年ほど前にはシベリアと科学界という単語をくっつけて使うと、奇異に感じたものだ。外国人だけでなく、欧州ロシアの多くの住民にとっても、シベリアは想像を絶する厳寒と限りなく続く針葉樹林帯の果てしない王国に思われていた。

しかし、シベリアにソ連科学アカデミー・シベリア部が設立されてからまだ四半世紀にもなっていないが、その本拠地であるノボシビルスク近郊のアカデムゴロドクは、誇張せずに言って今や世界中の学者たちに知られている。シベリア部では自然科学のすべての基本方向が最新のレベルで研究されている。四万人以上の科学者がシベリア部の60の研究所で働いているが、その中にはソ連科学アカデミーの90人の正会員と準会員、四〇〇人の博士と約四〇〇〇人の博士候補がいる。シベリア部の学者の中にはまた、60人のレーニン賞、国家賞の受賞者、20人のソ連科学アカデミー記念賞金や記念メダルの受賞者、20人の国際的学術賞金や賞の受賞者がいる。

シベリア部の核物理学研究所の素粒子・核融合物理学の分野における研究





は広く知られている。ここでは世界で初めて衝突ビームの構想が実現され、電子＝陽電子衝突ビームを持つコライディングビーム加速器が開発された。そのうちの最大のものは、ＶＥＰＰ＝4加速器で、その周囲の長さは三〇〇m以上ある。このような装置では電子は事実上光速に等しい速度で動き、そのさい電磁波の放射（シンクロトロン放射）の形でエネルギーの一部を失う。この放射は原子の変位の撮影に利用される。シンクロトロン放射はまた物質の元素分析にも使用され、物質1g中の一億分の1の混入物の存在まで明らかにすることができる。このような精度は、石油製品やさまざまな鉱床の鉱石を分析するときに重要である。

4 プリモーリエ地方。ソ連科学アカデミー極東学術センター生物・土壌学研究所。採集したチョウの標本を分類しているところ。

5 プリモーリエ地方。ソ連科学アカデミー極東学術センター自動化技術・制御プロセス研究所。大陸だな調査用のプログラム制御式自動潜水装置〝スカト＝ゲオ〟。

6 ソ連科学アカデミー・シベリア部ブリヤート支部（ブリヤート自治共和国）。東洋学研究室ではチベット医学の秘密の解明に取り組んでいる。

地質学・地球物理学研究所の学者たちは、アンドレイ・トロフィムク・アカデミー会員の指導のもとで石油とガスの埋蔵量を予測する方法を開発した。細胞学と遺伝学の分野でのシベリアの生物学者たちの研究は、シベリアの条件下で農作物の収穫率と畜産の生産性を著しく高めることを可能にした。基礎科学の成果に基づいて、シベリアの鉱物・土地・森林・水資源の利用、国民経済コンプレクスの発展、環境保護問題で大規模な系統的調査・研究が展開されている。

ソ連科学アカデミー・シベリア部の学者たちはノボシビルスク大学と積極的に協力しているが、ここには特別の物理・数学学校と化学学校がある。

25年間に二万五〇〇〇人以上の外国人がシベリア部を訪れた。アカデムゴロドクでは国際的な学術団体のシンポジウムが開かれており、制御核融合反応にかんする会議、国際鉱物学会第11回大会も開催された。シベリア部の学者たちは社会主義経済統合の統合計画の実現に参加している。ここには触媒作用研究所を基礎としたコメコン加盟諸国の工業用触媒センターがある。シベリア部は「インターコスモス」計画の実現にも積極的に参加している。

主要目標は未来に

シベリア科学の今日とその日常の活動ぶりには、敬服の念を禁じえない。しかし広大なこの地域全体にとってもそうだが、シベリアの科学者たちにとって肝心なのは、将来のことである。課題は非常に大きい。何しろ今のところ、ソ連の国民経済企業の80％が国の欧州部にあるのに、天然資源の80％以上がウラル以東、シベリアにあるからだ。従ってシベリア人だけでなく、ソ連全体の主要な課題は、シベリアの生産力を優先的に発展させることである。だがこれは、燃料・エネルギー問題の綿密な科学的研究と、地域の最も効果的かつ統合的な開発の厳格な経済的基礎づけが必要だということである。シベリアの開発は10年で終わる事業ではない。いや、一〇〇年でさえ終わらない。専門家たちは空間的にも、時間的にも並外れた規模で考えなければならない。

このようにして地域の部門別および各部門間発展計画――「シベリアの石油とガス」、「シベリアの石炭」、「バム地帯の経済開発」その他が生まれ、これらはやがて単一の長期地域計画「シベリア」に統合された。計画の策定に最も積極的に参加したのは、アベル・アガンベギャン・アカデミー会員を長とするシベリアの経済学者たちである。

長期地域計画「シベリア」は、エネルギー消費産業部門が現地のエネルギー資源に結び付くいわゆる地域生産コンプレクスをつくることによって地域の調和した経済発展を予定している。同時にインフラストラクチャー（社会的生産基盤）の諸要素――商業・教育・文化施設網、住宅コンプレクス、輸送システム、コミュニケーションが発展する。人々はここでソ連欧州部に少しも劣らない生活をするにちがいない。

このような地域生産コンプレクスは、たとえばカンスク・アチンスク炭田、サヤン・シューシェンスコエ水力発電所地区やシベリアの若干の他の地区に創設される。

西シベリアの油田――チュメニ州のサモトロールやその他の地区は世界中に有名だが、ここは現在国内の炭化水素原料の主要基地である。一九八五年にはここで三億八五〇〇万―三億九五〇〇万tの石油とガス・コンデンセート、三三〇〇億―三七〇〇億立方mのガスを採掘することが予定されている。

シベリアの石油埋蔵量について、ソ連科学アカデミー・シベリア部第一副議長のアンドレイ・トロフィムク・アカデミー会員は次のように語っている。

「今のところ西シベリアの石油とガスは、地下の最上層の、一億―一億八〇〇〇年前に形成された地質学的に若い白亜紀の地層からだけ採掘されている。これらの層の下にはもっと古いジュラ紀の地層があり、ここにもやはり石油があると考えられる。今日では、その下の古生代の地層（年代では三億年以上）にも貴重な原料のストックがあることが確実視されている。シベリアの石油がさらに何十年も採掘の基礎になることは疑いない」

シベリアの開発は、科学者たちにますます広範囲の調査・研究を要求している。例えばそれは、ここでの農業生産の最適発展を目的とした生物学的探求であり、ここの条件下では珍しくない環境の極限的諸要因に対する人体の医学的適応問題の解決である。また、特別の科学計画が、今後5年間のうちに最適の石炭加工技術を何種類かの競合技術の中から選定することを予定している。これはつまり石炭から、石油の代わりになる液体モーター燃料を得ることである。この加工工程では、以前には廃棄物として捨てられていた貴重な生成物のすべてを最大限に利用しなければならない。



シベリアの学者たちの前途にはこの地域の規模と潜在的な富に全くふさわしい大きな仕事が控えている。

太平洋の岸辺で

ウラジオストクの極東学術センターから首都のモスクワまでは現代の快適な航空機で8時間かかる。科学はここで太平洋岸にたどり着き、更に15隻の学術調査船でこの岸から遠い海へと進出している。これらの学術調査船は事実上太平洋のすべての水域で活動しており、ソ連の宇宙船とも連絡を保っている。

極東学術センター——これは19の研究所であり、北極圏内のウランゲリ島から北緯42度のピョートル大帝湾内のポポフ島までにある多数の常設の施設である。センターの研究所はウラジオストク、ハバロフスク、ブラゴベシチエンスク、マガダン、ユジノサハリンスク、ペトロパブロフスク・カムチャツキーにある。

極東は、大陸から大洋の深みへ移行する地球で最も広大な地帯の一つであり、そこには周知のように、きわめて豊かな鉱床が形成されている可能性がある。だから極東学術センターの研究活動のかなりの部分が地質学と地球物理学に割かれている。この分野では多くの研究が日本の学者たちと共同で行われている。

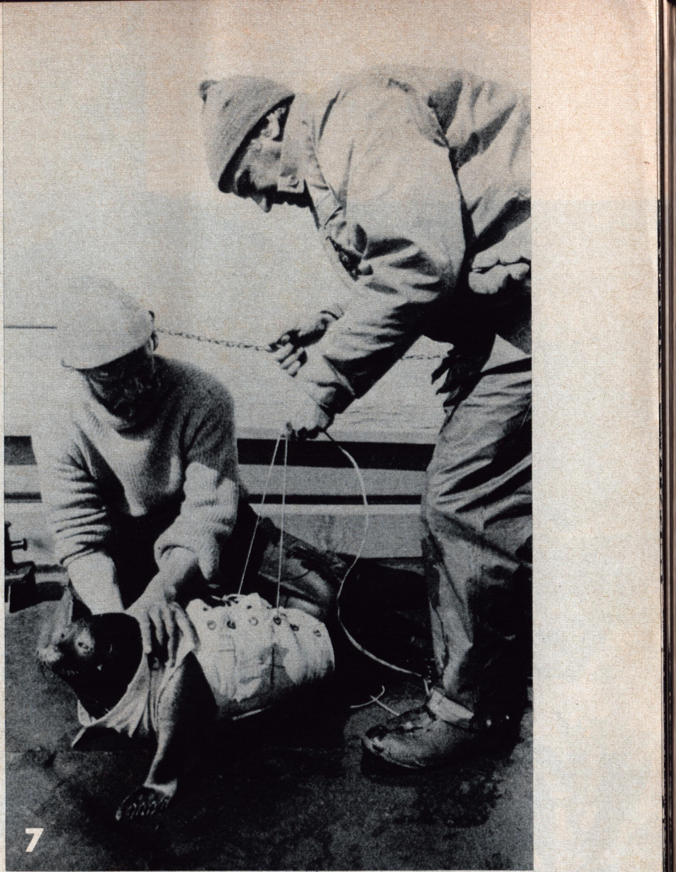
ソ連極東の生物学者たちの研究は、大部分が太平洋の動植物に直接関係している。周知のように、海底資源は今のところ決して合理的には利用されていない。海洋が生産するバイオマスは、事実上全人類を養うことができるのに、

である。

ウラジオストクが面しているピョートル大帝湾には、ユニークな海洋自然保護区があり、ここでは広範な科学研究が行われている。これは太平洋の生物圏保護にかんする大きな仕事の端緒にすぎない。海洋の動植物の珍しい、消滅しつつある種類の保存とその数の増大について権威ある科学的勧告を出すことが予定されている。

自然保護区内では貴重な海洋動物、たとえばホタテガイ、その他一連の貴重な魚の養殖場が数カ所設置された。科学研究のほかにこれらの養殖場は直接の経済効果も上げている。

海洋の動植物には少なからぬ貴重な物質が含まれており、これは医学、食品

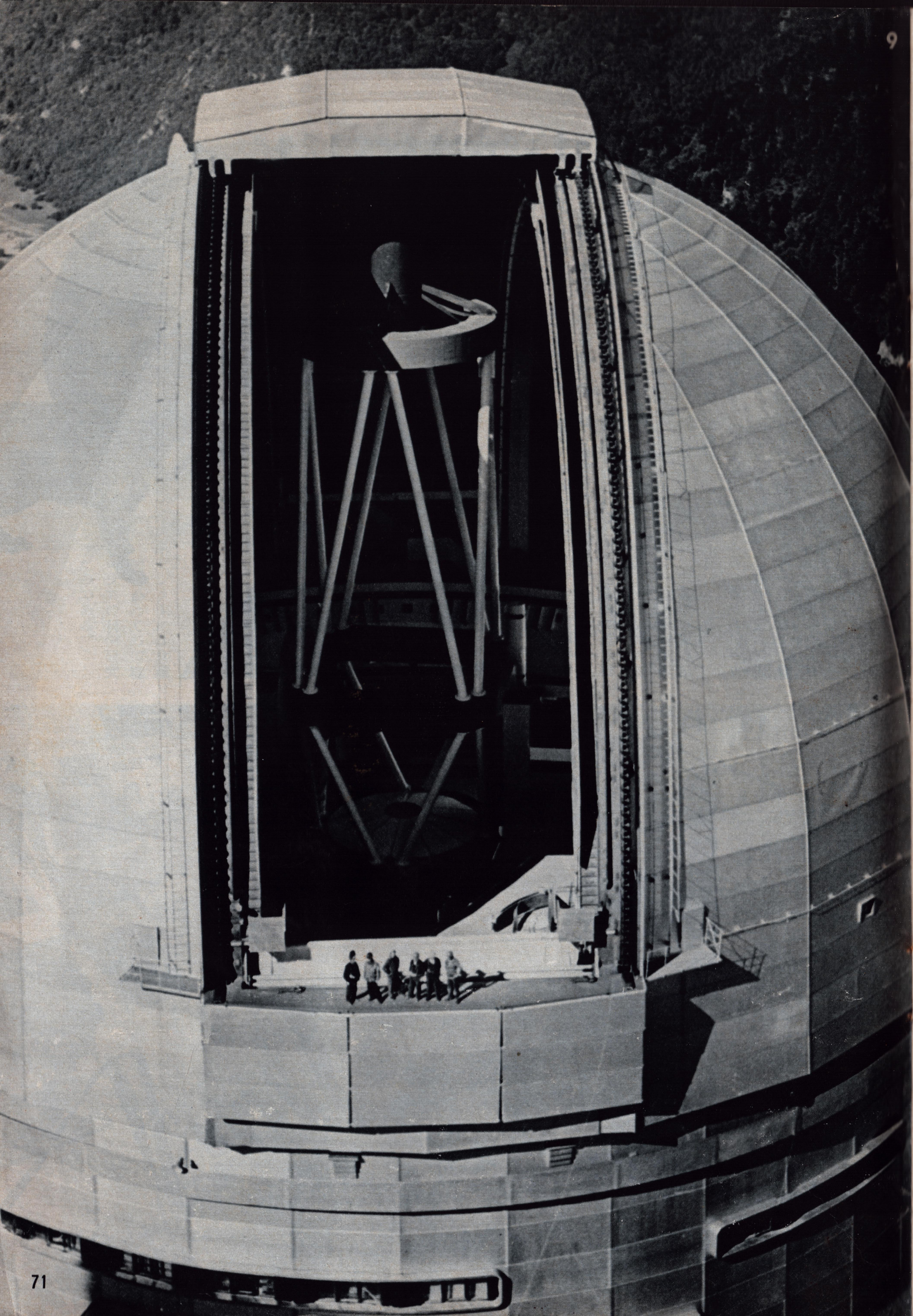




7 バイカル湖畔（イルクーツク州）にあるソ連科学アカデミー・シベリア部の湖沼学研究所。バイカル・アザラシの心臓実験の準備をするE・ペトロフ（左）と米国のエルスナー博士。

8 ソ連科学アカデミー・シベリア部核物理学研究所のファイトトロン（クラスノヤルスク市）。環境を人工的に調節して作物の生長実験をしている。

9 ソ連科学アカデミー特別天体物理学測候所。北カフカズのスタブロポリ地方ゼレンチュクスカヤにある。



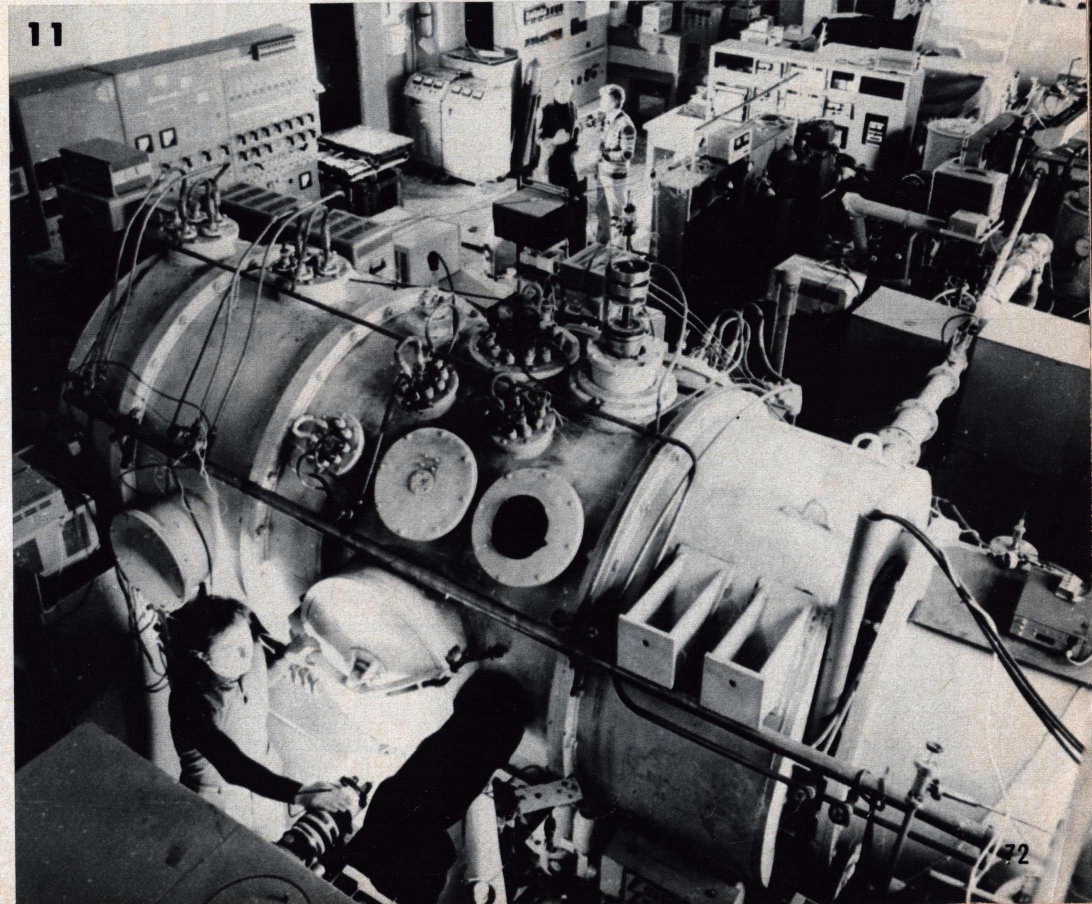


工業、農業で利用できる。極東学術センター付属太平洋生物有機化学研究所の専門家たちは、海のさまざまな生物の一連のたん白＝酵素、炭水化物、ヌクレイン酸、色素を抽出し、研究した。動物ステロール（鉄分を形成する物質）、サケ・マスの白子からのヌクレイン酸（医学用）、朝鮮ニンジンの成分との類似が発見されたナマコから抽出した物質を含む、一連の試料を実用化することが勧告されている。

極東学術センター付属サハリン総合研究所は、極東にとって緊急に必要な津波問題の研究で特に有名になった。

自然のこの恐るべき現象を制御する可能性は今のところない、とセルゲイ・ソロビヨフ・ソ連科学アカデミー準会員は考えている。しかし津波に備えることは可能だ。サハリンの学者たちはこの課題を遂行した。今では津波警報システムがつくられ、津波の予報の信頼度は一〇〇％に近付いている。

極東学術センターの学者たちは、カムチャツカにあるソ連唯一の火山学研究所で広範な研究を行っている。この間欠泉と火山の地方で、専門家たちはあまり究明されていない地下エネルギーの活動を直接観測し、科学実験を行い、重要な総括をするという貴重な可能性を持っている。





極東学術センターの経済調査研究所の活動についても簡単に触れておこう。ワレリー・チチカノフ研究所長をはじめ研究員たちは、ソ連極東の総合地域発展計画の策定に最も積極的に参加した。この計画がめざしている主要目標は、全極東経済を高度に発展した単一の地域生産コンプレクスに変えることである。このための原料資源、天然資源はあるが、しかしそれらを合理的に利用し、計画的に開発することが重要なのだ。

※　※

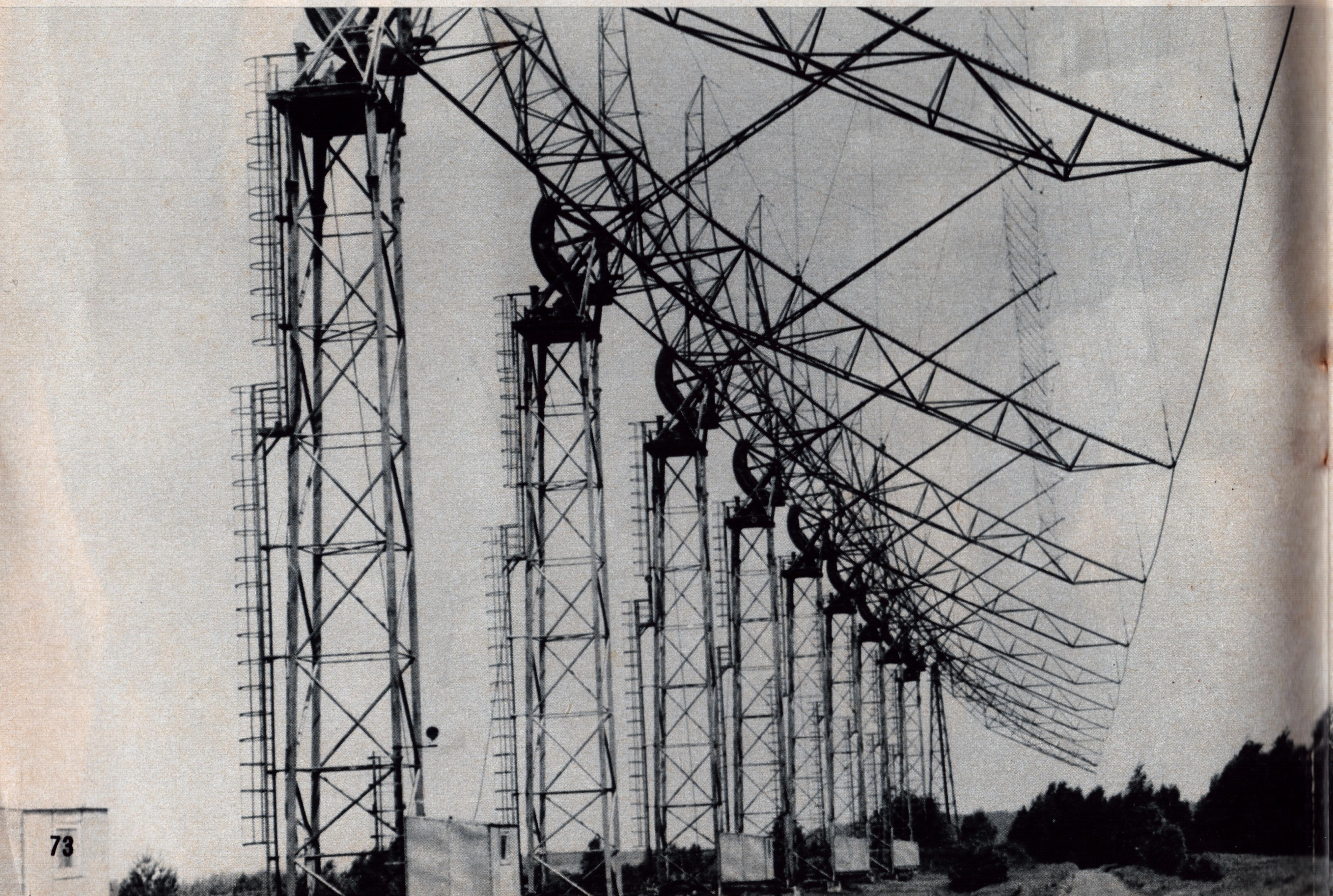
当然ながら、ロシア連邦共和国の科学者たちの活動は、以上に述べたことだけにとどまらない。われわれはモスクワやレニングラードのような大きな、ソ連で指導的な科学センターには意識的に触れなかった。国のかつての辺境地方の科学活動からロシアの科学研究の一端を示したかったのである。

10 毛皮獣の人工増殖はシベリアの動物学の主な研究分野の一つ。写真はギンギツネの飼育研究をするイルクーツク毛皮獣研究所の研究所員のナジェジダ・ブロボジロワ。

11 ソ連科学アカデミー・シベリア部熱物理学研究所の新しい課題の一つは、液体ヘリウムの熱・流体力学の研究。写真は低温ヘリウムを利用した低密度気体力学装置。

12 ソ連科学アカデミー極東学術センター。実のついたエレウテロコックの木を観察する海洋生物学研究所生理学・薬物学部長のI・ブレフマン教授（医学博士）。

13 モスクワ州プシチノ市にある電波望遠鏡





これがカスパロフ家のほとんど全員。

世界チェス界の新星
ガリー・カスパロフ

アゼルバイジャン駐在本誌記者 ワレリー・グリゴリエフ
カメラ D・ドンスコイ

最年少の国際グランドマスター

一九七八年のソ連チェス選手権大会のあと、元世界チャンピオンのミハイル・ターリはソビエト・スポーツ紙記者とのインタビューで「ガリー・カスパロフはチェス界の異材であるといって間違いない。15歳の若さで大試合に出てこれほどよい成績をあげた棋士は、私の知る限りではフィッシャー（米国）とスパスキー（ソ連）の二人だけだ」と力を込めて語った。ターリは中年層以上の世代の他のチェス棋士と同じく、ソ連選手権大会の〝平穏を破った〟立



カスパロフ（左）対世界チャンピオン、カルポフの対戦。３度対局したが、いずれも引き分け。

て役者ともいうべきバクー出身の若いカスパロフを買ったが、わずかに経験不足がたたって彼は3位までに入賞できなかった。

それから4年。そして新しい発見があった。一九八二年夏のモスクワのソ連チェス選手権大会に来た外国招待客たちに対して、元世界チャンピオンのミハイル・ボトビンニクは、「以前私はカスパロフが現世界チャンピオンのカルポフに対抗できるようになるのは、一九八五年以後だと見ていたが、どうもユーゴのブゴイノ国際大会を観てか



▶サッカーもカスパロフが熱を入れているものの一つ。

らは、もっと早く対抗できるのじゃないか、と考えるようになった」と語った。もちろん、棋士に対してとかく点がからいといわれているミハイル・ボトビンニクが、これほどの賛辞を呈するまでになったのは、ブゴイノの大会でカスパロフが1・5差で勝ったためだけではない。この4年間にガリー・カスパロフは、ソ連チャンピオンになり、三つの国際試合で勝ち、世界ジュニア・チャンピオンのタイトルを獲得し、ソ連ナショナル・チームの一員として世界チェス・オリンピックや欧州選手権で勝ち、チェス史上最年少の国際グランドマスターになった。

栄光への前進

アプシェロン半島の北の海辺に位置するアゼルバイジャンの首都バクーの近くに、30kmにわたって広がる砂浜がある。日に焼けて黒くなった男の子たちは、ここで初めてサッカーを身につける。昨年の夏私はここでガリー・カスパロフにも会った。モスクワの地域対抗戦に備え、自由時間をさいてやけた砂浜でボールを追っていた。

「サッカー、自転車競技、水泳が好きですね。一〇〇mは12秒以内です」とガリー・カスパロフは日焼けした顔に笑みを浮かべる。

均斉のとれた髪の黒いこの青年を見て、私は8年ばかり前にバクーのチェス・クラブで初めて出会った時のことを思い出した。そのときやせた小さな少年が、たったいま勝ったばかりの対局の局譜を解説していた。大勢人が集まっていたので、少年の声は上ずり、興奮の余り手から力が抜けてしまい、解説盤の駒をどうしても動かすことができなかった。

ガリーがチェスを始めたのは6歳の時だった。初めのころは「頭の体操と思考の論理のトレーニング」のために必要だと父親から言われて、チェスの問題や練習課題に熱中した。

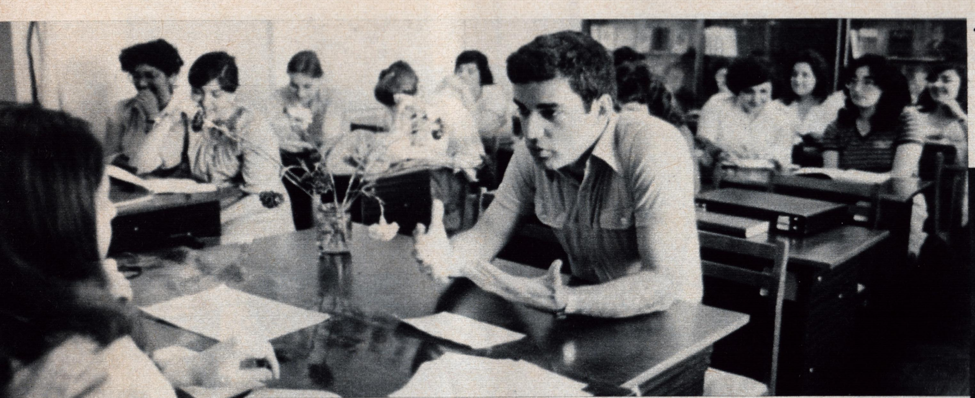
おじいさんはガリーにチェスを教えようと考えつき、7歳の孫をチェス・サークルのあるバクーのピオネール・学童宮殿に連れていった。そしてその日からチェス名人へのガリー・カスパロフの12年に及ぶ前進が始まったのである。

彼は合理的なスタイルを信奉した。抜群の記憶力が物を言って、有名なグランドマスターの数多くの名譜局を援用することができた。

カスパロフが驚異的な成功を収めたのは、彼のまれに見るすぐれた才能と骨身を惜しまぬ勤勉さのおかげだけではない。それについてミハイル・ボトビンニクはこう語っている。

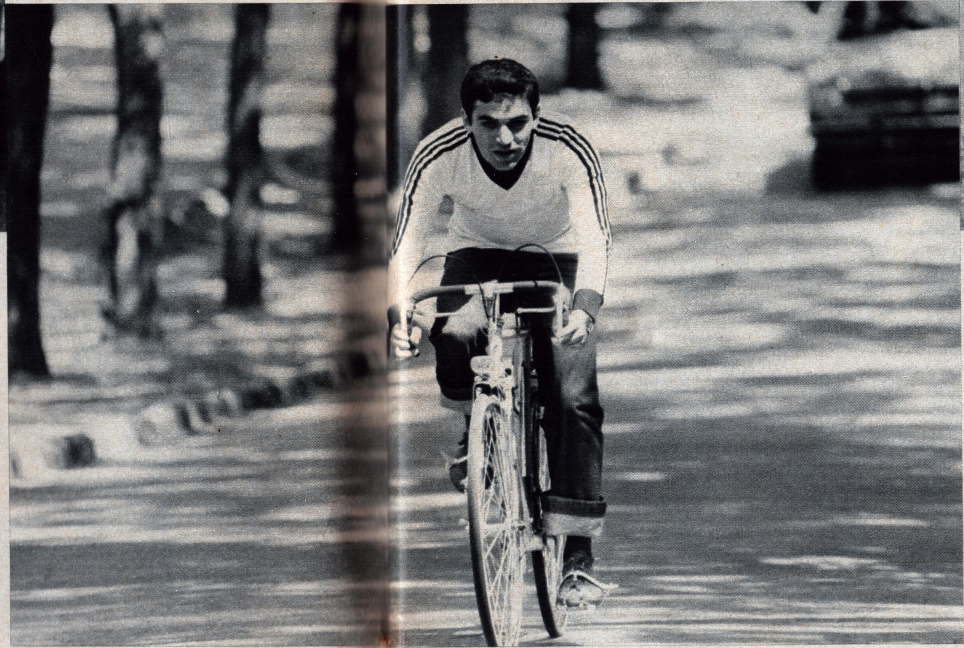
「わが国には英才児童を探す立派なシステムがある。こうした子供はピオネール会館や宮殿のサークルに入っている。青少年を対象とする全ソ競技会が定期的に催されていて、そこでチェス棋士の力を最終的に判定することができる。カルポフの場合もそうだったし、カスパロフもそのようにして育った」

つけ加えておくが、ガリー・カスパロフはミハイル・ボトビンニクの学校（有名棋士が初心者を指導している学校の一つ）で学んだ。当時すでにカスパロフは、チェスによく通じ、理論の知識も広くて、関係者も舌を巻いてい



◀バクー外国語教育大学で学んでいる。

自転車を乗り回すのも、カスパロフの楽しみ。



た。しかしミハイル・ボトビンニクによる授業こそ、カスパロフにとってチェスの大学であり、その後ガリーはあいついで輝かしい成果をあげることができたのである。

性格

次に5年前にやったカスパロフとのインタビューの一部を紹介すると

――チェス界で尊敬する人は？

「ぼくがチェスを始めた一九六九年に、ボリス・スパスキーが世界チャンピオンのタイトルを獲得した。それでスパスキーがぼくの最初の崇拝者になった。その後はロバート・フィッシャーを崇拝しています」

――負けたときはどういう気分になるか？

「すっかり気分が落ち込み、涙さえ出る……」

こんど同じ質問に対してガリー・カスパロフはこう答えた。

「いまチェス界に崇拝者はいない。同僚や競争相手は尊敬している。世界の名人たちの名局譜を分析して、ぼくの肥やしにしているが、それはとても幸せな仕事だ。負ければやはり気分が悪い。しかし今は負けると泣くのはおばあさんだけだ。敗北はある意味では勝利よりももっとためになる場合があると分かるまでになった」

二つのインタビューを比べてみると、ガリーが大人になり、ずっと控え目（貫録がついたと私は言いたい）になったことが分かる。客好きと率直さは彼の性格の一つに数えられている。彼は悪意のない冗談や人と楽しく話し合うのが好きだ。交際好きだが、友だちは選び、自分の成績に対する評点は厳しい。

そしてまたインタビュー。

――自分の家庭をもつ見通しについて……

「家庭をもつことは確かだが、いまのところぼくに必要な女の人はただ一人、ママだけだ」

関心

もちろん、チェスはガリー・カスパロフの生活の中心である。しかしすぐ

れた才能をもつ彼は、生活の調和に努めているので、おのずとそこから広い趣味が出てくる。

ガリーの趣味は歴史、地理、音楽、建築、演劇、それに当然スポーツである。しかしコンサート、展覧会、記念碑の除幕式、体育室などどこへ行こうと、彼は決してチェスから離れられない。別にそう努めているわけではない。趣味とチェスが共存しているのである。ガリーに言わせると、スポーツ、芸術、文学は棋士に必要な直観を訓練するのに最もよいという。

ガリーはアゼルバイジャン外国語教育大学3年生で、英語と文学を学んでいる。

専門を選ぶさいに彼の頭にこびりついていたのは、「言語を知れば、それだけ君は人間の深みを増す」と言ったカール・マルクスの言葉である。チェスとは縁のない専門を選んだあとも、彼は認識方法がチェスの分析とほぼ同じ数学や他の精密科学の勉強を続けた。

ガリー・カスパロフはチェスの熱心なPRマンである。彼はアゼルバイジャンのまちや地区をこまめに回り、初心者と多面打ちをやり、過去の試合の話をしている。こうした活動はむしろ円熟したプレーヤーがやることである。私がそう話すと、「ソ連のグランドマスターたちがぼくに教えてくれたことが、まだ頭にはっきり残っている。もちろん方々を回っていると、ぼくの時間がなくなるが、チェスの初心者たちのために各地を回ることは必要だ」という答えが返ってきた。

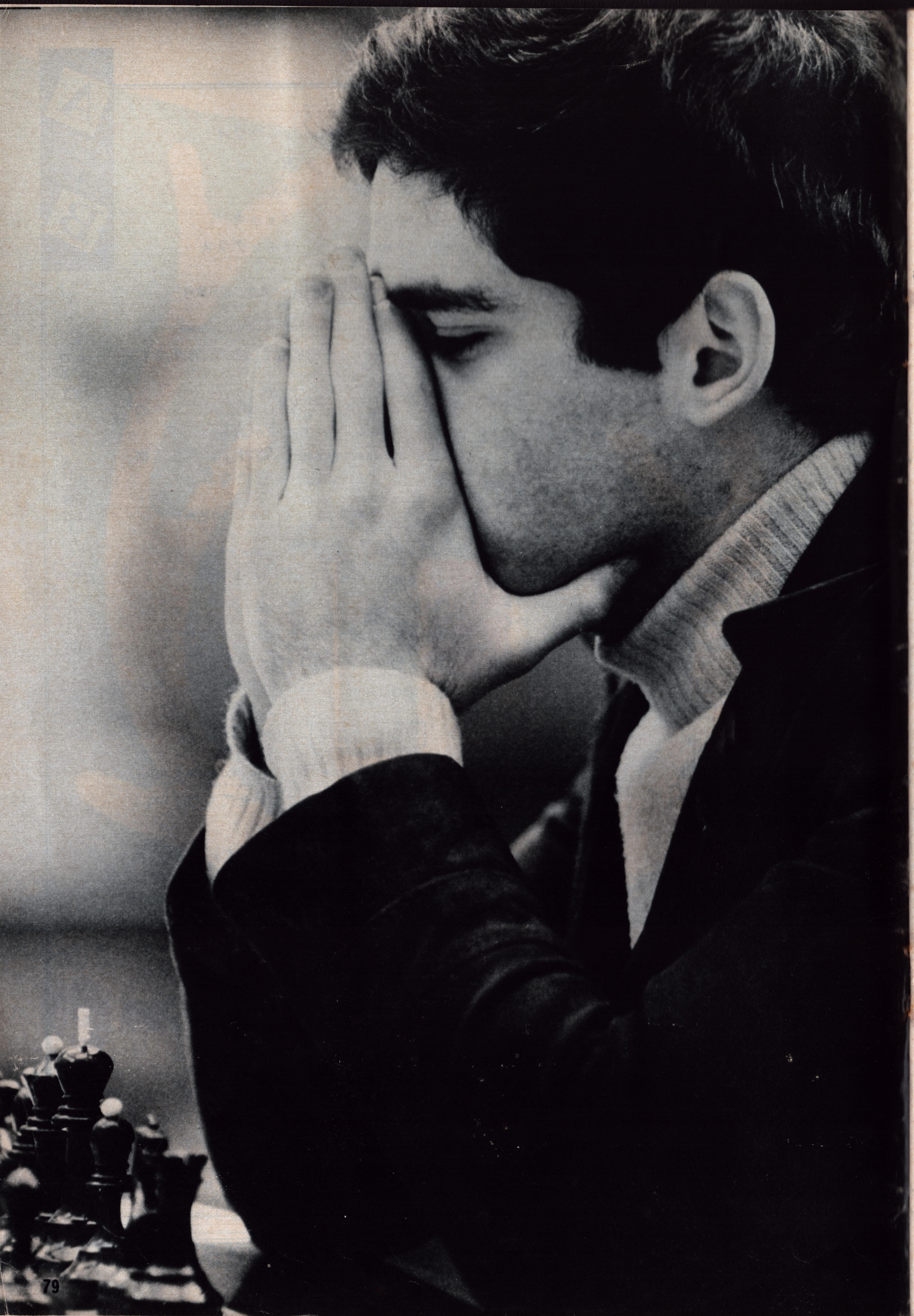


アパート横の小公園でもチェスを指導。

世界チャンピオンに挑戦

モスクワの地域対抗戦で2位を1・5引き離して勝ったガリーは、世界チャンピオン、アナトリー・カルポフへの挑戦権を争う8人の棋士の一人に入った。しかもカスパロフがチャンピオンとの決戦にまで進む公算はきわめて大きい。

モスクワ地域対抗戦やルツェルンのチェス・オリンピック'82を含む最近の国際試合で、カスパロフはめざましい成功を収めた。世界チェス連盟が公式に採用したエロー方式では、彼はいまアナトリー・カルポフに次いで、世界第二のレイティング（点数）を持っている。しかし肝心なのは、数字の指標（この指標は時には形式的であると言える）だけではない。カスパロフの棋力も、創造的潜在力も、十分に現実的なものなのである。



◀沈思黙考する19歳のグランドマスター



ロシア語のページ

ＡБＢ

――NHKテレビロシア語講座から（２月前半）――

テレビでロシア語を学ぼう！

この欄では、ＮＨＫ教育テレビ・ロシア語講座のご協力を得て、同講座のテキストから主な表現や単語その他を紹介させていただきます。ロシア語の単語や文にはカナで一応の発音を表記しますが、是非テレビの放送で実際の発音に親しんで下さい。

きょうの表現　（２月２、３日放映）

Со мной не пропадёшь.
サ ムノーィ ニ プラパヂョーシ
ボクと一緒ならだいじょうぶ。

〔説明〕

⊙мной＜я　の造格

⊙пропадёшь＜пропáсть　「だめになる、破滅する」。２人称単数形だが、主語はтыではない。このような文を普遍人称文と呼ぶ。普遍人称文とは、動詞の現在型変化の２人称単数形（тыの形）の動詞述語をもった、主語のない文のことである。普遍人称文は、誰にでも当てはまる一般的動作、可能性、必然性などをあらわす。

きょうの単語　（２月２、３日放映）

① востóк（ヴァストーク）　東
② зáпад（ザーパトゥ）　西
③ юг（ユーク）　南
④ сéвер（シェーヴィル）　北
⑤ кáрта（カールタ）　地図
⑥ кóмпас（コームパス）　磁石、羅針盤

きょうの表現　（２月５、７日放映）

Магазúн ужé закры́т.
マガジーン ウジェー ザクルィートゥ
店はもう閉まりました。

〔注〕このзакры́тはзакры́ть「閉める」という動詞から作られたもので「閉められた」の意味。形動詞である。

きょうの単語　（２月５、７日放映）

① стакáн（スタカーン）　コップ
② подстакáнник（パツタカーンニク）　コップ受け
③ бáнка（バーンカ）　缶
④ буты́лка（ブトゥィールカ）　びん
⑤ крýжка（クルーシカ）　ジョッキ
⑥ рю́мка（リュームカ）　ワイングラス

きょうの表現　（２月９、10日放映）

Вéчер организýется студéнтами.
ヴィエーチィル アルガニズーイッツァ ストゥヂェーンタミイ
パーティーを催しているのは学生です。

〔説明〕

⊙вéчер　「夕方、夜」の意味のほかに、「～の夕べ」「パーティー」の意味がある。

⊙студéнтами＜студéнт　「学生」の複数造格。意味は「学生たちによって」となる。

きょうの単語　（２月９、10日放映）

① вéчер（ヴィエーチィル）　パーティー
② приём（プリヨーム）　レセプション
③ тáнцы（ターンツィ）　ダンスパーティー
④ собрáние（サブラーニイ）　集会
⑤ концéрт（カンツェールトゥ）　コンサート
⑥ заседáние（ザシイダーニイ）　会議

きょうの表現　（２月12、14日放映）

Разрешúте мне сказáть нéсколько слов.
ラズリシュイーチイ ムニェー スカザーチ ニェースカリカ スローフ
私にひとこと言わせてください。

〔説明〕

⊙разрешúте＜разрешúть　「許す」の命令形。「～させてください」。

⊙нéсколько слов　文字どおりには「幾つかの単語」。словはслóвоの複数生格。

きょうの単語　（２月12、14日放映）

① кýбок（クーバク）　カップ
② золотáя медáль（ザラターヤ ミダーリ）　金メダル
③ серéбряная медáль（シリェーブリンナヤ ミダーリ）　銀メダル
④ брóнзовая медáль（ブローンザヴァヤ ミダーリ）　銅メダル
⑤ знáмя（ズナーミャ）　旗
⑥ грáмота（グラーマタ）　賞状

ＮＨＫテレビ・ロシア語講座のテキストは、最寄りの書店でお求め下さい。書店にない場合は、日本放送出版協会（郵便番号150 東京都渋谷区宇田川町41―１、電話03・464・7311）へお問い合わせ下さい。

今日のソ連邦
一九八三年2月1日号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集　ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3−9−13・電話03−447−3536）
定価　一五〇円（購読料は会費に含まれる）